

山とやま

特集：平成 6 年年末から 7 年年頭
富山県内の山岳会の記録

魚津岳友会
ハイキングこぶしの会
ジャンダルム山岳会
富山山想会
富山登攀クラブ
富山勤労者山岳会
高岡ハイキングクラブ

キリマンジャロ・タンザニア紀行／ネパール・アイランドピーク
屏風岩・東稜～前穂高岳／西大谷山／赤谷山
黒部別山・南尾根～剣岳・三ノ窓尾根～早月尾根
錫杖岳・前衛フェース 3 ルンゼ 1 ルンゼ
八ヶ岳・広河原沢 3 ルンゼ／八ヶ岳・広河原沢左俣～赤岳西壁
猪谷川／甲斐駒ヶ岳・黄蓮谷左俣～赤石沢奥壁中央稜／洞山
唐沢岳幕岩・大凹角ルート／津谷／中央アルプス・滑川奥三の沢
八ヶ岳大同心正面壁右フェースルート・
赤岳西壁ショルダーリッジ右ルート・日の岳稜／剣岳・小窓尾根
北岳／白鳥山／富士山／四阿山／大乗悟山／剣岳・早月尾根／燕岳
裏六甲・不動岩フリークライミング

野獸の国のラグタイム

キリマンジャロ・タンザニア紀行

H7.1/16~1/22

羽柴倫子（富山登攀クラブ）

日付	行動	標高
1/16	マラングゲート（登山口）より入山	1400m
	マラダラハットに宿泊	2700
1/17	ホロンボハットに宿泊	3700
1/18	高度順応のためマウェンジ峰ヘトレッキング	4300
1/19	ギボハットに宿泊	4700
1/20	未明ギルマンズポイントヘアタック 5:00 登頂	5700
1/21	ホロンボハットへ下りる	
1/22	マラングゲートへ下山	

「Karibu Madam」(ようこそ ご婦人)

むせかえるような臭いと土埃の中、迎えられた私たちは、これから約15日間を予期せぬ素晴らしい思い出で綴ろうとは、考えもしなかった。

何故なら、現在報道される限りのアフリカ大陸の大半は、干ばつと豊沃、戦闘と治安、貧乏と金持ち、と様々なカテゴリーの中でも前者のイメージが強く事実、GNP世界一の日本からみれば貧困で不衛生で開発途上の卑しき人種が存在している、はるか彼方の地としてしかとらえられなかったからである。

「Well come」とギラギラ充血した目を向けられた以上、Foreignerは郷に従うよりもかはない。Oh my god!

と、まるでNHKスペシャルの季節版海外ドキュメンタリーを多少ハードボイルドタッチで描いてみたのだが、後が続かないでいつもの調子に戻ってしまうのだ。

私たち一行は、総勢19名というちょっと寂れた商店街の慰安旅行といった風情で成田に集まった。成田というよりも、熱海でひとつ風呂浴びて、サービスのお銚子2本を大事～に飲んじゃうほうが、マッチしそうなジジ・ババが大半。よく見れば、呉服屋の旦那や、角の豆腐屋のおっちゃん、金物屋のおっちゃんはこの前の商店街を活性化させる会の会長選でみごと落選の超エラそーオヤジといった面々が、リュックを担ぎ、スニーカー履きで、腕には高度計つき（カシオの最新だかんねえ～）時計をごっつく鈍くさりげなくハメた15人（キンのダイヤ入りロレックスよりも目立つ）はただならぬ雰囲気をかもし出している。それにひきかえ私ときたら、ま一いちお～格好はパタゴニアでコーディネートでも、山つつよりも、ちょっとアフリカヘダンスを見に行くの！そのついでにおいしいコーヒー豆でも買おーかと思って。というかるーい感じで来てしまったのさ。ん～問題だ。

その19名はパキスタン航空で、マニラ、バンコクを経てカラチに向かった。機内では、トランジットの度流れるコーランの美しく清らかな旋律で、30時間の度も最後まで楽しませてくれた。お経というものは意味がわからなくても、なんだかありがた～い気分になって、両手のひらのしわを合わせたくなるもの。私もついつい「どうか無事に旅立てますように」と、前の座席についている簡易テーブルにひれ伏してしまった。

こうして乗り換え便もケニアに到着。

むわ～っとする暑さの中にもじりじりとした熱気が、体臭というよりもわきがの強烈なものとのミックスしたような空気になって、いたるところから発生している。震源地は闇にまみれているアフリカンらしい。日本人のわきがよりももちろん強烈だし濃厚である。外人は一般的に体臭が強いけれども、同じ黒人でも南米系は乳臭いべっちょりしてピリっとしたトウガラシ系のスパイシーな香りであるのに対して、アフリカのそれは、ういろうのように舌にからまる、歯の裏側にこすり着くようなまつたりとした中にもツーンとくるワサビのような後味さっぱりの和風わきがのようだ。とはいってもわきがは

わきが、くさいことはくさい。それでもスーケースークーしていると「今まさにわたしはアフリカにいるのだ！」と実感してしまうほど、わきが中毒になっている。心なしか「臭いのないアフリカなんて・・クリープの入れないコーヒーよ」と目はうつろに、口元はゆるみ、あ～たまんない。

体臭評論家の私としては、生物における汗腺分泌物と食生活および風土との相関関係は著明であり、遺伝学的には多少の関連があると実証されてはいるものの、明白なのはキレイキレイせねばくさいくさいになっちゃうぞということである。あしが（足の臭い）もしかり。数年前からはひざが（ひざこぞうの臭い）を発見し、常日頃からひざをクンクン嗅いで研究をしておるのだ。と臭いにかけてはその道のエキスパートといつても過言ではない。えらいだらうー。とどのつまりくさいものが好きなんです。でも、おじさんのヘアトニックぶんぶん枕にはさりげなくタオルをかけ防衛手段もおこたらない。何でもいいってわけにゃあ～いかないのだ。

というわけで、アフリカとのご対面はおごそかにつつかなく進み、「結構肌に合うかもしない」という結論になったのだ。そう思うと皆オトモダチねぇーという親近感が倍増し、緊張感は伸びたゴムひものようにだらーんと弛緩し、なんだかリラックスしてしまう私ありました。

各種の手続きをすませ、10等身 Black Power と6等身ずんどこジャパニーズの一団は、熱気あふれるナイロビの街へと消えていった。

驚いたのはナイロビの中心街にそびえ立つナイロビ・ヒルトン。このあたりではまさに要塞のようにそびえていて、その一角をはずれると急にすきや風平屋建てトタン張り空き地付きという状態。

ベルボーイのちゃんとしたお出迎えにむふむふとうなづきながら、17名はロビーに集結した。このツアーメンバーでなんだか知らないうちになんだか仲良くなった4人連れがいる。それは、カラチでのトランジットでの際、レストランで朝食をいただきながら自己紹介した時のこと。各自トレッキング歴を少し遠慮気味に語りはじめたとき、九州からやってきたじじいが、「わしは、ヨーロッパアルプスも制覇したし、アラスカのホエールウォッチングも行ったり、まぁ言うならば旅のプロフェッショナルですが、ははは。今回でもって9回目ですぞ。すんごいだろう。キリマンジャロなんて軽い軽い。屁みたなもんです。皆さんお荷物にならないように頑張ってねえ～」と、自身に満ちた様子でしゃべるのだ。やおらかぶったキャップには、アルパインツアーのロゴがご丁寧にも縫いつけてある。いやーな予感を感じながら肩をふるわせていると、向かいの女性も鼻をふがふがさせている。この一瞬を見のがさなかった私は「んーおぬし、話せるな」と、ふんだのだ。そしてその第6感は大当たり。かくして、どちらともなく磁石のように導き合ってむすばれたのだ。

横浜の雰囲気漂う元アナウンサーの大谷さん（とても40過ぎには見えないです）

と、妹さんの和製グレタ・ガルボ井手さん。センチュリー・ハイアットのBarでサブマネをしているファンキー白井氏。木更津のおじいちゃん中村翁の4名がヤング・チームということで多少無理はあるものの、他のおったしゃクラブを圧倒し、虐げ、横目でせせら笑いながら、単独行を試みようとするのだ。

その晩は明日からの行動チェックをして早めに眠りについた。

ナイロビからはるか150キロ、アンボセリ・ナショナルパークへとバンは走る。中心街を走ると、包囲360度の草原の中を走っていく。時折、青いビニールシートでこしらえた露店があり、店先にバナナや柑橘類が並んでいる。それらが何十も集まってバザールになっているようだ。木造のスタンド・バーなんかもあって、みんなの憩いのサロンになっている。バーの入口には必ずコカ・コーラや7アップの看板があり、コークは世界の合言葉とは事実なんだな~とペプシ党の私は少し悲しくなった。

舗装道路は地平線へと伸びているが、大きな穴ぼこをアスファルトで繋いだような道である。ドライバーのハンドルは右へ左へと目まぐるしいし、針は70キロを指したままだ。オフロード状態のパジェロに、胃けいれんを起こしそうになりながら、とりあえずドライブ・インに入った色鮮やかな花に囲まれたスペニアショップの脇でのどを潤すことになり、そよそよと繁った木々の下、テーブルを囲んだ。

「スリー・ビール・プリーズ」元アナ大谷さんは至るところでビール、ビール、の人である。白井さんはバーテンという使命に燃えるのかホテルに入ると、マティーニ、ギムレットの難解技をくらわし、鋭い目で酒棚をチェックする。中村翁はまあ一とりあえずという感じである。私とガルボ井手さんは下戸のためコーヒーを頼む。出てきたのは、なまぬる~いビールとインスタント・コーヒー。冷えていないビールはまああきらめもつこう、ここはアフリカだ。しかし、ケニアでインスタントはないんじゃない。それもうやうやしくポケットサービスなんかするんじゃないよ。まったく・・・と、いつもコーヒーの私は缶詰粉末コーヒーお徳用サイズをせっせと山のように入れ、カップに目を沈ませた。

ここからまた数時間車に揺られて国境近くのアンボセリ・セレナ・ロッジに到着した。南国ムード漂うロッジはプール付き、各コーティングは木々の茂る並木道の両側にたち、室内は瀟洒なベッドが置かれ、壁に描かれたエキゾチックのな絵、アフリカ風蚊とり線香がムードよろしく整然としていた。さっそく荷解きし即カービングサファリへと出発。

ヤングチームは1台の車に乗り込み（他はシルバーシート状態）やんや、けたたましく出発。助手席には添乗員が乗り込む。2人のツアーリーダー、成田からシマウマ模様の帽子が目印の海輪氏、まもなくマカルー遠征へでかける予定の岡本マジオ氏らは高齢化をストップさせる重要な使命をもって赴任したのではと思いたくなるほどエネルギー・シューな存在であります。

車は草原をガタゴト進むうち何度も急停車。ブレーキテストでもやってんのかなと思

っていたら、ドライバーははるか彼方へ指さしている。

「エレファンタ ライト ゼアー」

(うっそー！目をこらしてもアカシアの木しか見えないじゃない。念のため双眼鏡をのぞくと、いるいる、ぞ、ぞ、ぞうだ～)

牙のなくなった象は悠然と我々を見つめ、「ちょっとくら芸でも披露するべえ」と耳をパタパタ。我々は「よっ待ってました」とばかりにシャッターをきる。

「ゼブラ シマウーマ」あっち

(ほんとだーしまうまだー)

「ガゼル レフト」

(これがガゼルね～)

「オーストリッチ」

(えーっだっちょう。ちがったダチョウ)

オーストリッチといえば、デパートの輸入舶来品コーナーでガラスケースに鎮座している高級ケリー型バッグではありませんか。そのバッグが生まれる前のお姿で、こんな近くに。

「いらっしゃい、ダチョウくん。一緒に日本に帰りましょう」

そんな甘い言葉には見向きもせず、ダチョウくんはひらめ筋をふるわせて走り去った。

しかし、なんて目がいいんでしょうね。アフリカ人が視力4.0というのは本当なんだな。こんな調子で次から次へと動物が、現れては消えてゆく。舞台の袖で控えている役者のごとく目まぐるしい早さで2時間のサファリは終わった。

ベッドに投げ出した身体はずぶずぶと泥の中のカバになったように、深淵へと旅だった。

国境を越えタンザニアへ

アンボセリを後に一行は国境の町ナマンガへ向かった。ケニアの国境近くになるとガラリと雰囲気が変わり、みすぼらしい屋台が密集しあはじめる。バナナの房がぶら下がり、柑橘類やパパイヤ、トマトが山積みされている前でアフリカンが、あーでもないこーでもないと大騒ぎ。

「うちのおっかーときたらよ、俺のへそくり見つけちまって大騒ぎよ」

「あんたはいっつも、酒、酒ってうるさいし。たまには、わたしの腰巻きぐらい新調したいわ」ってね。

きっと世間話って万国共通だろうなあ。まさかアフリカンが集まっちゃー「人種隔離宣言はどーたらこーたら。ネルソン・マンデラはエライ」などと、眉間にしわを寄せちゃあ討論しているはずはあるまい。あるかもしないけど。話している内容に察しがつくと、なんだかほっとしてアチチの車の中もなごやかに思えてきた。車窓からはそんな人々の姿があちこちから目に入った。

ゲートに近づく。それとともに人間の数も増え、入国審査のためバンを降りたときは、押しくらまんじゅう状態で集まってくる。手には様々なアクセサリーをぶら下げ人間屋台さながらだ。年齢不詳の顔面しわしわおばはんマサイは耳たぶを大きく穴を開けて、にじんだ目がしらには時折、ハエがとまるのも気にせず「70\$ね買ってよ」と、腕輪をぎっしりとひっかけてやってきた。

「No money! I don't need it, so that bought same things yesterday」

3回ぐらい言ってようやく離れてくても、また次のマサイが「こいつはもっといいよ」とやってくる。言っても言っても群がってくるしつこさには、辟易した。巷でよく聞く、英語教材の押し売りやアンケートにすぐつかまっちゃう人ってどうなってしまうのでしょうか。あっという間に、山のようなお買い物のゲームになちゃって、身ぐるみはがされ路頭に迷うしかないでしょうね。彼らの目は悲しくも濁って見えた。

ゲートの兵士に見送られ、タンザニア入国。

TANZANIA。ケニアの隣国ではあるが、グリーンの宝石でちりばめたような風土は豊でやさしく、人々の柔軟な横顔はアフリカへ来て初めて知った素朴さがあった。山のゆるやかな起伏にたなびく雲は果てしなく、山紫水明のごとし。

アルーシャ National Park 内のモメラ・ロッジは、真っ白なサイロ状の形をなし、バナナの皮で葺いた屋根、ささやかな室内を占めるベッドの上には昔なつかし蚊帳が下がっている。停電は常時、シャワーは水、冷蔵庫なんてあるわけない。ロウソクの灯が唯一、生活を照らし心をなごませ、大いなる自然を感じさせるエナジーなのです。

夜半、風がドアを叩く。時折やってくる突風が、窓越しから冷えた空気を送り込み蚊帳を揺らす。風にたなびく木々のさわさわとした乾いた音は、ここがサバンナのど真ん中などと広大な漆黒の闇にメロディーを奏で、ひたひたと巡回の犬は野生の動物から我々を守ってくれている。まわりのロッジの灯もぽつりぽつりと消えていくと同時にやすらかな喜びが眠気となって全身を覆った。

5時起床。熱いコーヒーで元気をつけていつものサファリへ出発。ここはアンボセリよりもキリンがたくさんいるらしい。早朝と夕方は動物にとってはお食事タイム。少しでも涼しく安全なうちに、夜露に濡れた草をほうばる。なんて自然の摂理なんだ。少し走ると、すぐあの長い首がいたるところから見える。そう、キリンちゃんがつぶらな瞳でこちらを向いている。黒目がちの濡れた瞳は、男性ならずとも魅惑されそうになってしまうほど美しい。スマートな御脚は長く、タイルを張り合わせたようなナイスバデーは動くアートのようだ。

早朝サファリを終え、いざキリマンジャロのふもとマラングゲートへと旅立った。様々な人種が、ゲートを抜けていく。我らすんどこジャパニーズはスタイルも山屋らしく、ほおかむりにサングラス、右手はステッキ左は雨傘と、ゲリラ部隊さながらのいでたち。ヨーロッパのクライマーは、ショートパンツにTシャツというちょっとセブンイレブン

にお買いもの風の軽装なのです。な、なんだこの違いは！。ゲリラ部隊の若手特攻隊である以上、ヨーロッパにお仲間入りするわけにもいかず、かといってアフリカンポーターの中で6等身をひけらかす自身もないまま、ツアーリーダーの影をけちらしていくほしかなかった。

出発点のゲート（1400m）から樹林帯を通り、休憩をはさんで着いたところは、マンダラハット（2727m）。緑繁った草原はとても3000m近いとは思えない。部屋割りがあり、池奥さん、相良さん、伊原さんというグランドマーザー風の3人がルームメイト。多少気をつかいながらも山小屋の世界はしごく当然のことなど自分に言い聞かせ、この後もつつがなく寝食共用していくのであります。

マンダラハットを後に今日は6時間の歩行。草原帯にはキリマンジャロにしかない美しい花が咲き乱れ何度も写真に撮る。

キリマンジャリカ ロベリア レッドホットホッカー ジャイアントセネシオ
昼食はゆで卵（黄身が白い）ジャムサンド、オレンジ、バナナのランチボックス。とってもおいしく感じられ、体調も良好。夕方目的地ホロンボハット（3720m）に着く。今日、明日と高度順応のためここに停滞する。即 tea time の時間。高山病にならないためには、1に水分の補給、2ゆっくり歩く、3食事をとるが基本的に自分で注意しなければならないことです。teaも1杯のところ3杯はおかわりしなければならないし、テーブルのポットも次々と空になっていく。タンザニアの食事も決してまずくない。じゃかいもや人参、素材をそのまま調理してあるので、ヘルシー・メニューといったところか。

体調はまあまあなのですが、ついにアレになってしまい、気分はナーバス。これから先を考えると不安がつのります。「しょうがないよね。行けるところまでいこうか。ここで待機してたっていいんだし・・・」腹痛をこらえながら、もうまな板の上のアジ状態。煮るなり焼くなりどうにでもして一、本当はたたきがいいんだけどね。とつまらんことを考えながらホロンボの夜は更けていった。

翌日高度順応のためマウェンジ峰へのトレッキング。福岡から来た矢野じーさんは当初からの下痢のため、休息らしい。なんでもアルパインツアーの薬をぜんぶ飲んじゃったらしい。それでも足りなくてわたしの部屋のおばさんからもらってたくらいだから。べつに一いいんだけどー70才越えているんだからなにもアフリカまではるばるやってきて無理しなくったっていいんじゃない？と私は思います。

4300m地点のメモリー峠までのトレッキングは、途中苦しく足どりも重い。見上げればマウェンジがそびえた立つ。茶色の岩肌はグランドキャニオンを思わせる険しさで、とてももろいため登る人はいないらしい。そりゃキリマンジャロをひかえて、こんなところで滑落するほど馬鹿者はいないでしょう。お昼には小屋に戻り各自フリー。

夕食の時間。明日のキボに上がると食欲が落ちるらしく、今日たくさん食べなくては

ならない。コックの暖かい好意によって、みそ汁、レトルトご飯、グリルチキン、キャベツの炒めもの、ポテトの揚げたもの、豆のスープ、デザートにバナナとマンゴー。早速、日本から持ってきたふりかけで久しぶりの日本食を味わった。早めに就寝。

8時15分出発。延々と続く砂れき帯は単調で、風も冷たい。呼吸がときどき苦しくなり、胸を張って横隔膜を広げるよう息をする。それでも体力が消耗していくのがわかる。ただ、食欲は十分あり、どらやきのあんこが涙が出るほどおいしかった。このルートはとにかく、ひたすら広大な岩の世界を歩くだけ。単調な景色にうんざりしてきた頃、ついにキボハット(4700m)につく。ガスってるためキリマンは見えず。

大部屋のベッドに安居の地を見つけたらすることは何もない。小屋のまわりを散歩する。早めに夕食。みそ汁、トースト、オジヤ、シチュー、パイナップルを食べる。かすかな頭の痛み、頭痛というほどではないが、なんなく絶好調でないのが分かる。あと数時間後には旅立たねばならない。あるだけ着て、シュラフにくるまって寝ようとするが、眠りは浅い。つかの間の睡眠であったが、もうアタックするほかない。

午前0時。重たい体をひきずって食堂へ行くが、皆口数が少なく、カップメンに口をつけられない人もいる。私も無理して、みどりのたぬきとクッキー3枚を食べる。曇っているため外気はさほど冷たくない。衣類調整が難しくなんとか着膨れると先頭集団の2番手で出発する。先頭には9と呼ばれている九州じじいがぎうずうしくも入り込んできた。いつもなら、むっとするところだが、腹も立たない、これは高度障害なのか。ヘッドライトと月明かりを頼りに歩き始める。狭い歩幅で、ゆっくりと、ゆっくりと。勾配はきつくなり、それに対して呼吸がついていかない。歩きながらの深呼吸はあえぐような感じで、苦しい。ザイルを使うほどの危険はなにひとつなく、ただあえぎあえぎ登っていくだけ。無味乾燥で、なんの注意もいらない点こそ、この登山の辛いところだ。必要なことといえば、ただ片足ずつ前に出すことだけ。ところが、足元はずるずると灰が崩れ、つづら折りの終点までいくと足を休めたくなる。ほんの2~3歩がうんざりするほど長く、すり足の行進は延々と続く。

早く休憩がしたい。何度も時計を見るがたいして経過しない針にいらいらする。やっと1時間毎に5分の休憩でほっと一息入れた。のもつかの間、体温が急激に下がっていく。寒い、つま先がジンジンしてカイロを入れなかったことを悔やみ、2枚重ねたはずの指先はピリピリしてきた。どんどん風が強まり、疲労も激しい。何度も引き返したくなる。

「まだ半分来たところだし今ならキボに戻って暖かい毛布につつまれて睡れるかも」

足は無意識に前にくり出しているだけ。

「ストップをかけろ。そして、帰ろう」

「いや、あの岩に着いたらガイドに言おう」と心に決めたまま登る。

2度目の休憩は何をするわけでもなく、ただ岩にしがみついて半眼状態だ。ガイドのジョセフが心配してくれるが、言葉が出ない。帰る気力さえなくなっていた。

隊列の長さは伸び、皆自分の息に合わせて、思い思いの足どりで歩く。3度目の休憩、

ここで2班にわかれた。私はどういうわけか1stグループに入っていた。どのくらい時間がたったのか、私にはわからない。頭痛、眠気、寒気、吐き気、ありとあらゆる不快な症状が全身を駆けめぐっている。足が鉛のように重く、疲れもピークにきた。なにもかもが嫌悪の対象となり、いやでいやでたまらない。これが高度障害であるとは、自分自身には気づくはずもなかった。

「キリマンジャロに登ったからって、別だんどうってことはない。元来本当の登山を知らない私には虚栄心や自尊心なんてものは持ち合わせていないのだから」

あと5分というところで、根を上げていると、ツアーリーダーの海輪さんが檄を飛ばす。大きな岩が屏風のように見えた。最後の岩場を無我夢中で登っていると、涙が止まらなくなってきた。なんでだかわからないが、目が潤むのだ。鼻をすすり、嗚咽をもらし、指先に力をこめて岩にしがみつく。

右手、左手、右足をひっかけ3点確保しながら、すっと頭を上げると、もう暗い岩はなくなっていた。5682mギルマンズポイントは岩に覆われたそんな広くない平ら火口ふちだった。ふっと力が抜け、今まで味わったことのない奇妙な心地よさが全身にまわった。しかし、それは快感というにはほど遠く、魂の抜けた体が、ただ、ぼーっと浮遊しているような感じだ。悲しくないのに、つらくないのに、うれしくないのに涙が出る。神経器官が麻痺しているのか、とめどなくあふれる涙はほほをついた流れた。

はっきりしてきた頭は、さらなる悪寒を許さず、疲れをいやすどころか、こんなところにじっとしていたくない気持ちでいっぱいになった。

「羽柴さんも大丈夫そうだから、ウルフへいかない？」

リーダーの声が遠くに聞こえた。

ウルフピークなんてとんでもない。朝日にはまだ早いが、すぐに出も下山したい気持ちでいっぱいなのに。下山を決めた私の行動力はさっきとはうてかわって元気満ちあふれているものだから、そう聞かれても仕方がないのだろう。でも、ごめんです。もういやだよ。

そそくさと写真を撮り、下山開始。途中大谷さんらとすれちがう。声をかける余裕はない。中腹あたりで朝日が昇るのを見た。茜色に染まった空は、またたく間に白みはじめ雲海の上に太陽がのぞきはじめた。明鏡止水この一語につきる。

あとはひなたぼっこをしながら、一直線に降りるだけ。あんなに苦しかった道程も、灰をけちらし加速に身をまかせて下ると、なるほど日が昇ってからじゃ登頂できないだろう。明るくなったキリマンジャロに頂を目指して登ると、あっという間にギブ・アップしそうである。でもついにやりとげたのだ。

「I'd get it」満足感がじわじわとこみ上げてきた。

キボハットへ戻り、疲れた体をベッドにまかせて睡眠をむさぼった。

ギルマンズ、ウルフから帰ってきた人の顔は一様に疲れ、汚れ、色あせ、ひたすら耐え忍んできたことを物語っている。続々と集まつた戸口には、ありとあらゆる粉飾を剥

ぎとった生命そのものが存在しているだけだった。

「こんなキタない顔で文句あっかー」晴れ晴れとした表情は美しすぎた。

休憩をはさんで、すぐホロンボハットへ降りた。

その晩見たモシの町の燈と南十字星は忘れることができない。

朝、身支度をすませいざマラングゲートへ。すれ違うクライマーは数日前の私たちと同じだ。まだ輝いている。臭くないし希望に満ちている。

「Hello How are you」

「ポレ・ポレね」（ゆっくりね）

陽気に声をかけ合い、足どりは軽い。

マラングゲートでは、ポーター・ガイド・コックら総勢40名が待っていて、登頂証明書が一人ずつ手渡された。ガイドのジョセフに日本の扇子をあげた。

こうして我らは晴れやかな気持ちでホテルのあるアルーシャの街へ戻っていった。その晩は、たっぷりのお湯で6日間の汚れを落とし、キャンドルのともったテーブルで（実は停電していたため）マッシュルーム・スープ、アイガモのソテー、アップルパイを心ゆくまで堪能した。

翌日は巨大クレーターが動物の宝庫というン・ゴロンゴロ National park でサファリを楽しんだ。ここではライオンの母子を写真に収めた。

翌日、再び国境を越えナイロビに帰った。打ち上げのそうめん大会をやろうということで、中村さんの部屋に夜な夜な集合。ルームサービスのシャンパンとワインは白井さんが栓を開けた。さすがホテルマン、コルクを鼻にもっていき一言。

「う~ん。朝焼けのサバンナにたたずむ若いマサイの女のようない味ですね」さすが堂にいったティストどおり、グラスの中の泡沫は心地よく喉を流れた。

マダム大谷さんの湯がいたそうめんはつるつるとおいしい。わさびにねぎ、ちぎりのりを薬味にして、あっという間に完成。持ち寄りのおつまみも貝柱や、柿の種、さけの燻製にのしいかと、やっぱり日本人だよねー。うまい！こたえられなーいと、まさに養老の滝のノリになっている。われわれはこういう場合なんか居酒屋の小上がりを即興してしまうのね。こうして場末の夜は更けていった。

ナイロビ最終日。オプショナルの市内観光を断り、和製グレダ・ガルボ井手さんと元アナ大谷さんの3人はまぼろしのドリップコーヒーを求めて街に出た。少し路地にはいるとコーヒーハウスらしき店を発見。ツタヤ（ローカルだな～）を思わせるすこ一しぶめのたたずまい。いざ、出陣。

入り口付近は豆の引き売りコーナーで、奥を見渡すと漆黒の闇。と、思いきや。スツに身を包んだビジネスマンがお茶を飲んでいる。これが異様なんです。全身ダークなせいか店内の光を吸収してしまって、我らの真っ白い顔がぽーっと浮かび上がり、パル

ック並にそこだけ明るくなっている。やっとのこと本場キリマンジャロ・コーヒーを楽しみ、つかの間のティータイム。

街は全く信号がなく、曲がり角はロータリーになっている。右から来る車を避け、いったんロータリーに入ってからぐるり一回りして右折道路に向かうシステムだ。歩行者というと、車を避けて横断するのみ。いくらせっかちな大阪人でも命がけでしょう。日本人は歩幅が極端に違うためか、いつでもかけっこ状態。なんでも交通事故が非常に多いらしい。

夕方、ホテルについて皆と合流し、アフリカン料理を食べにいく。そこは、串刺しになった肉塊をお皿の上でサーブしてくれるこの店で人気があるらしく、超満員。鳥肉、羊、牛、豚、そしてキリン、鹿、ダチョウ、ワニとよりどりみどり、おかわり自由。

「このキリン結構いけるよね」「私はダチョウが好みかしら」またたく間に胃袋に収まってしまった。

午後は午前1時のフライトを待つばかり。ザックを枕にケニヤッタ空港でほんやりする。長い長い旅も終わろうとしている。そしてまた次の旅が始まる。毎回、ちょっと日本が恋しく思う瞬間だ。灼熱の日差しに真っ赤なマサイカラー、キリマンジャロの白い頂、動物の匂い、現地人の人なつこい笑顔。アフリカは決して忘れる事はないだろう。

アフリカを訪れたものは必ずアフリカに戻るというけれど、理解できる一よなあ～。きっとまた、来んまい。人間の生まれた故郷へ、大いなるアフリカへ。

アイランドピーク ・トレッキング

H6.12/20～H7.1/16

村田慎二（ジャンダルム山岳会）

トレッキングですので、コースについては、それぞれの参考書が、親切でわかりやすく解説してありますので、それによられたい。今回ここでは、国内で、3000㍍までしか登ったことのない私が、5900㍍まで短い期間に挑戦した記録で、とくに同じようにトレッキング（海外遠征）を考えられている方の参考になればと、主に健康状態についてまとめて書いたものです。なお、コースについては、後日執筆する予定です。内容については、あまり深くありませんので、一読される程度が適当だと思います。

12/20

母、兄、山崎氏に見送ってもらう。汽車の中でも荷物の整理をして寝るのが1:30位になる。

12/21

上野で京成への乗り継ぎは、わりと分かり易く、出て右で近い。成田で海外旅行保険をかけたが、あまり意味がなかったかもしれない。70ドル換金した後搭乗手続きをする。金物は、全部はずして構内に入る。搭乗の構内バスの向こうにも免税店があった。飛行機に乗り込む搭乗口前にもボディーチェックがある。

バンコックに17:00頃着、時差は2時間（構内ホテル）dayroomがありそこに比較的安く泊まる。部屋は温度調節がきかないらしく、夜冷房が利きすぎて17°Cと、とても寒い。毛布を追加して寝る。シャワーがあり水量が少ないとそれでもとても良かった。空港内の売店ではほとんどの所で円が使えた。お金は大きい方が換金に喜ばれるが使うのが大変で、おつりがバーツで返って来た。（ドルでのおつりのもらえる店もある）

12/22

前夜のレストランでは、（人が少ない時間）4バーツと円支払が出来たが、翌日はバーツでしか支払いが出来なかった。東京でのチケットは、搭乗引換券で2時間前に搭乗手続きが必要。搭乗前のボディーチェックでは、バンドのバックルにでも感知。カトマンズ空港には、直ぐ下に山が見えるところを縫うようにして進入する。ネパール空港は、ほとんど昔の日本の国鉄の構内かバスターミナル程度の所で入国審査は、2～3人だっ

たので審査には時間がかかった。その後税関審査。荷物を受け取るが、共同荷物の1つがなくなる。係員に説明し紛失届けを出すがこれに時間がかかる。そのため税関の審査は5:00以降となり、審査はほとんどフリーパスとなる。ザックをチョークでマーキングされ空港の外に出る。外にはコスモトレックより出迎えのバスが来ている。外は荷物を運びチップを要求する子どもと人が、直ぐ寄ってきてくろだかりになる。事前のパスポートのコピーで袖の下を使いトレッキングパミュートを既に取ってくれた。（国立公園の許可書は黄色）宿には、8:00過ぎ頃に着く。シャワーからお湯が出て気持ちが良かった。宿に現金は置けるが多額の現金は自分の身に付ける。

12/23

6:30にホテルを出る。空港には6:54に着く。荷物の重量オーバーで全部を同じ飛行機に乗せてもらえないかった。ロビーと搭乗待合室の間に暗幕の小さなところがあり、そこでライターを要求され1つ渡し簡単なボデーチェックが終わり、8:00待合室の中に入る。8:14に第1便出発。フライトは、9:25～10:00。ルクラ空港には10:15着陸、すこぶる良いフライトだった。1回でスムーズに着陸する。降り立つと日本の夏山と同じ気候。雪なし、天気がすこぶる良い。谷の向こうに見える山の名前は、メグラ。2900～2975mまで1時間トレーニング（散歩）する。インターナショナルラウンジに泊る。ストーブの煙突の通っている部屋で夜も暖かかった。

12/24

7:00起床、10:00第一便の到着を待って出発の予定となる。朝8:00ごろから食事。荷物が多くて昨日の便に乗らなかった荷物が朝の便で（羽毛ジャケットと一緒に）来る。午前中の出発が、食事の後になる。1時出発となる。2つ目の沢から少しづつ雪が付き始める。15:30にトウクドゥンガに着く。積雪は2m程度。持ってきた全部の個人マットを敷いても寒かった。

12/25

朝-1°C。ヨーロッパの2人パーティが、ポータートラブル（雪がついていてポーターが登るのを拒否したらしい。）で下って来た。8:20に出発する。4000m以上は、1歩に3～4回呼吸しなければ登れない。13:00に4400mテント場に着く。200～300m空荷で上がりテント場に下る。（峰の1/2の所まで高度順応のために登る）2時にテントに帰る。積雪約30cmで、新雪の所以外はクラストしている。雪崩の心配はなさそう。頭痛がひどい。そのままでは分からぬが頭を振るとズクズクする。お湯を1リットルもらい飲む。小便が、10回以上出る。朝には頭の痛いのがとれていた。夜中に息苦しくなり時々起き上がる。

12/26

シェルパが用意してくれた現地マット（スポンジの敷き布団の下にひく様な厚さ2～3cmマット）は、非常に暖かかった。朝ポータースト（法外な報酬を要求される。）で下山となる。ヨーロッパ2人の他の隊が上って来る。日が出れば気温は10.6°Cとな

る。11:00 にテン場出、チュリカルカに 13:00、ルクラには 15:00 到着。ポーターがザックの荷物を開け最後に分かりにくい小物をもらっていくことがあるらしい。（ポーターのこそどろに気を付けること）

12/27

ルクラを 13:00 に出る。パクディーの吊り橋に 16:00 に着く。ルクラで T 氏が、1 万円換金しようとしたが、大きすぎてルピーに換金出来ない。

12/28

8:30 に出る。黒部の下の廊下みたいな所を登っていく。10:30 気温は 14 度、昼食をとる。（曇り）マンゾマンゾを 11:30 に出る。12:00 過ぎに国立公園検問所に着く。検問所でトレッキングパミュートをわたし公園内に入る手続きをする。ゲート通過には、時間がかかる。事前に先行して（許可書）パミュートを持っていくパーティーもある。谷の所は、13:00。気温は、20 °C。（山の名前…ココンディー）ナムチエバザールに 16:00 に着く。3440 ㍍。テントは広い方が楽だった。朝は、ヤクやポーターに荷を預けるのにかなり早く荷造りする必要がある。食事の時のバッティーやキッチンの使用料をキッチンボーイが払うがそのお金はその都度わたす。

12/29

ナムチエを出一度下の方へ下る。水平道からはエベレスト、アマダムラム等が見える。谷の所には、水車の経文筒がいくつもあった。非常に暖かかく夕方まで天気が良かった。夜テントの中で隊員の一人が風邪をひいたのか咳をしていた。

12/30

停滞日となる。太陽が出ているが、気温は 0 °C 以下と思われる。洗濯物が日のあたる所に干してあるが凍った。午前天気がよいが午後雪雲が出る。辺り一面雪となる。夕方頃から風邪もしくは、高山病の初期症状が出る。夜は、少しふらふらといった状態。夜痰が出て幾度か外へ出る。テントでなく小屋に泊まったので外に出るのが楽だった。太陽が出ていて日の当たる所は暖かくこれが気温が高いとの錯覚をし、薄着だったのにも原因があると思われる。

12/31

朝から雪となる。パンポチエを 10:40 に出る。雪雲が、タンポチエまでついて来た。ここ 2 ~ 3 日の行程と同じように上がって行くがザトワラの時の登りよりは、高所に順応したようで、楽で、4200 ~ 4300 ㍍では、登りやすかった。タンポチエには、15:20 着く。夜から朝にかけて結構痰が出る。夜は体の状態が良くなかった。鼻をかむなどトイレットペーパーを大量に使う。

1/1

高度順応するために北側の裏山に登る。日の当たるところの外の気温は、-7 °C。9:30 に出る。朝出る時の日陰での気温は、-15 °C。12:30 に 5000 ㍍まで登る。ピーグにはまだ少しあるが、翌日のテン場の標高に達したので下山となる。下山の時の気温

は、-1°C。13:40 にテン場に到着。1日だいたい天気が良かった。5000mでは、ザックの中に入れたフラッシュが見つからない等物忘れや判断ミスがある。写真を撮るのに息を止めるが後が苦しくて、ハアハアと激しく呼吸する。夜寝るときに、少しでも温かいようにと羽毛服を着てシュラフカバーをしたが、狭く苦しくてだめで結局上にかけて寝る。朝までぐっすり眠る。風邪は少し良くなるが夜は、やはり辛かった。痰の出る量は少ないが、朝までにコップ1杯位は出た。この日からは、シュラフの横にコップを置きそこに痰を出す。これで外に出ないで少しあは楽になる。

1/2

タンポチエを9:40 に出る。13:00 にディンボチエに着く。雲量は、5%以下。はっきりとしたトレースはなく河原のような所をあちらこちら蛇行しながら登る。夜の12:00 以降ぐっすり眠る。小屋素泊まりは、一泊50Rなので体の具合の良くないときは、テントより小屋泊まりの方がはるかに条件が良い。ちなみにトイレットペーパーは、60Rだった。

1/3

朝7:30 起きる。8:30 に食事。ディンボチエを9:30 に出る。ザイティングラードの様な所を登って行く。15:30 にBCに全員到着する。霧は、無い。雲母のこまかなので、ほこりっぽい。気温は5°Cで晴、雲量20%位。夜はせきが出たがるが一応症状がよい。(31日～2日及び3日の夜は、息苦しく時々起きる。)

1/4

気温-1°C。10:30 にBCを出る。ハイキャンプ(HC)まで高所順応のために往復。踏み跡のあるしっかりとした道がついている。風が強くハンガロンだけでは冷たかった。ミートンが必要。風はかなりの強風。12:30 にHCに到着。13:00 にHCを出る。14:00 BC戻る。初日のザトウラワの登りのようにかなりの負担だ。一步上がるのに何回も呼吸をする。HCでは立っているだけで息がきれた。(BSテン場は、全く留守にしないこと、中をのぞかれるなどのいたずらをされることがある。)

1/5

12:00 に(アイゼン、ゼルブスト、靴下、コッヘル、非常食、フォーク、スプーン)を持ってBS出る。13:15 にHCに着く。前日に比べるとかなりらくだった。14:15 まで高所順応のために上部へ空荷で(2000m)位登る。日陰では気温は-5°C。

1/6

4:30 出発…9:30 に雪線(最終雪付き)…10:00 クレパスを過ぎた所でreturn…10:30 に雪線(アイゼンをはずす)…11:30 テン場に戻る。登りはやはり1歩づつだった。冰雪(雪渓)上でもHCに初めて上がったときと同じように息がきれた。アイゼンが自分で装着出来ず。雪線より上では、全ての物が凍るが、めちゃくちゃな温度低下ではなかった。雪線までは登山道がしっかりとついているが一人では迷い易い。クレパスは、幅は2cm以上だが人が通れるブリッジで繋がっていた。氷上は、アイゼンがしっかりと効

く状態。人によって違いがあるが、H Cから上の行動では、無理をするとせき込む（空咳が出る）。アタックの日及び次の日は、爪の色が真っ白となる。酸素不足が原因と思われる。その翌日は、ピンクが戻ってきた。

1/8

10:00 にB Cを出る。11:21 に来るとき休んだ河原の大岩の所に着く。12:30 にはB Cに入る前の宿泊地、チュクンに着く。13:30 出発ディンボチェへ向かう。雪が途中から降ってくる。夜、泊まったゲストハウスで宿の主人がもてなしてくれる。

1/9

朝、積雪10㌢程度。空は、平野部の方のみ晴れている。ヘリコプターがルクラまで、4回往復してくれた。はじめの予定では、下山はディンボチェまで大型ヘリコプタが来る予定だった。しかし雪が降ったのでルクラに来ていた大型ヘリがカトマンズに帰って行ず、ルクラ～ディンボチェ～カトマンズ間の燃料が無く、小型ヘリがディンボチェ～ルクラをピストン輸送して、ル克拉～カトマンズ間を大型ヘリに乗りカトマンズまでフライトする。大型ヘリがル克拉～ディンボチェ間の飛行実績がないせいもありこの間は、小型ヘリコプタとなる。

その他特記事項

4000㍍までに1回、5000㍍を越えた所に1回、高度障害が出る。人によって違いがあるが、H Cから上の行動で無理をするとせき込む。テントのテントは、一人もいないようなことに、ならないようにする。飛行機等の荷物は、よく物が紛失するので幾つもにも分散させる。高度によるせきなのか肺水腫なのかよく分からない風邪には特に注意すること。

ネパールに滞在中、日本人2人がトレッキング中に高山病で亡くなっている。1例は、シェルパが、具合の悪い人にヘリコプタを呼び帰るのをすすめたが当人は、風邪といってヘリを帰した。（シェルパは、助言するが雇い主の意志決定が優先する。）その後体調が悪くなり手遅れで高山病となり死ぬ。他の例は、奥地に突っ込みすぎと4000㍍を越えてまだアルコールを飲んでいた。（県内出身者）T氏1リットルの薬袋から毎朝薬を飲むがふだんと変わらず効果なし？。T氏ナムチエバザールにて50R～40Rで新品の靴を買った。高所順応とは、翌日の宿泊地の高度まで、出来るだけ空荷で無理しないで登ることが最も効率が良い。

会計関係

ルクラ～ザトワラ間

ポーター 46人 300R／人

キッチンポーター 5人

ル克拉～ナムチエ間

ポーター 38人 150R／人…相当のゾッキヨ13頭位

(荷物30kg×38口)

シェルパ 3人 200R／人 ルクラ～ザトウラワ間
キッチン…コック 150～200R／人 も同じ、キッチンもリース
ナムチェ～BC
ポーター 32コ 120R／頭…15頭で32コ（16頭）
ポーター 2人 150R
BC～ディンポチエ（帰り） 10頭

雇用関係

コスモトレック→テンバ（シェルパ）→ブルバキタール（シェルパ）
→ミンマ（シェルパ）
コスモトレック→クマール（コック）→ナレンダー（キッチン）
→（キッチンポーター）

主に参考になった文献関係

参考文献は、山と渓谷社 ザ・ヒマラヤ・トレッキングが大変わかりやすく役にたった。
一人歩き地球の旅は、あまり役にたたなかった。

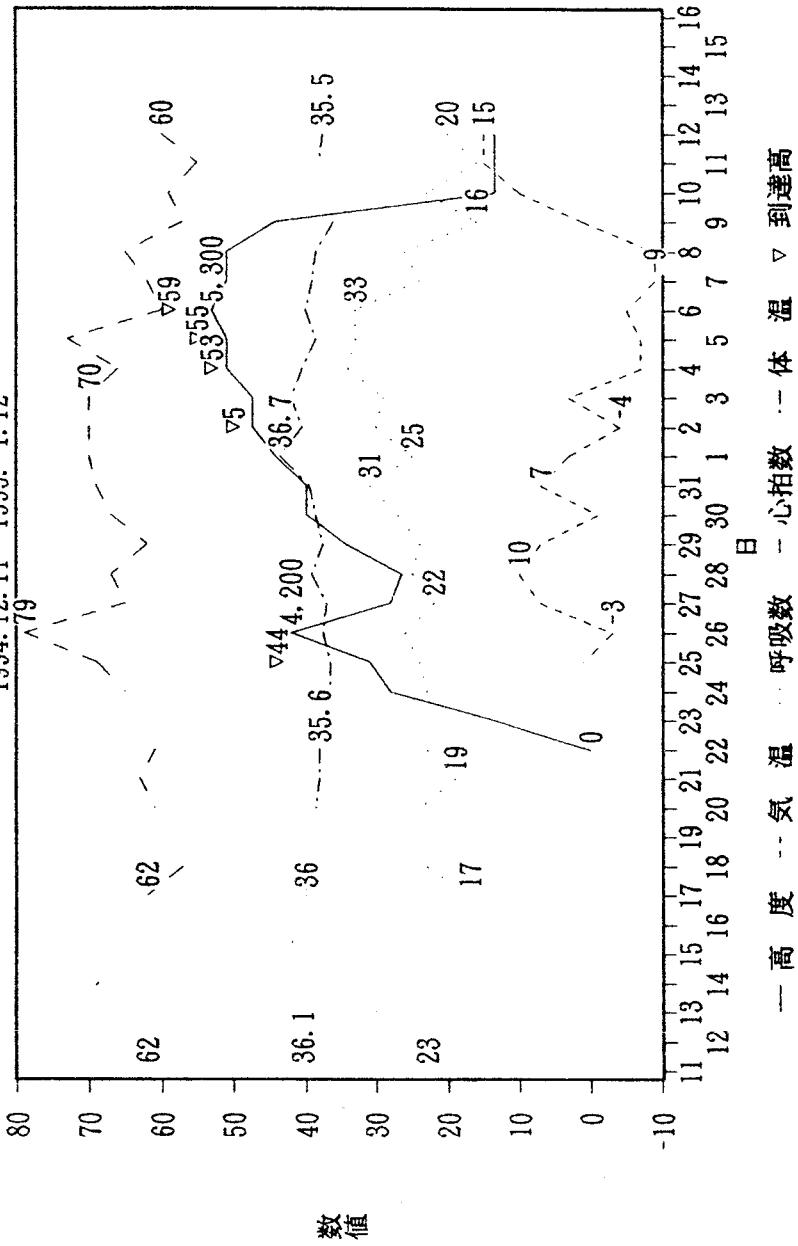
移動標高と健康状態

年	月	日	高 度	朝の場所	体の諸症状	天気	気温	呼吸数	心拍数	体 温
1,994.	12	11		自宅				23	62	36.1
		12								
		13								
		14		自宅				24	61	35.7
		15								
		16								
		17		自宅				17	62	36.0
		18		自宅				23	57	36.0
		19								
		20		自宅				24	61	35.7
,		21		成田				19	63	35.6
		22		パソコン				23	61	35.6
室内泊		23	1,350	カトマンズ*		○				35.5
↓		24	2,800	ルクラ		○		23	65	35.3
テント		25	3,100	トゥクトゥンガ	夕方頭痛	○	1	24	69	35.3
↓		26	4,200	-		○	-3	26	79	35.5
↓		27	2,800	ルクラ		○	7	22	65	35.4
↓		28	2,652	パンタイング*		○	10	25	67	35.8
↓		29	3,440	ナムチエ		○	7	24	62	35.5
テント		30	3,985	パンボチエ	テントサムカセヨヒク	○	-1	27	67	35.7
室内泊		31	3,985	パンボチエ	風邪	※	7	31	69	35.9
↓ 1,995. 1	1	1	4,413	ティンボチエ	風邪	○	3	25	70	36.7
↓	2	2	4,730	チュクン	風邪	○	-4	30	70	36.1
室内泊		3	4,730	チュクン	風邪	○	3	29	70	36.4
テント		4	5,087	BC	セキミニナルヒトイ	○	-7	34	66	36.1
↓		5	5,087	BC	タンモテル	○	-7	33	73	35.7
↓		6	5,300	HC	セキテル	○	-5	33	60	36.0
↓		7	5,087	BC	肺水腫？手真白	○	-9	24	62	35.8
テント		8	5,087	BC		※	-9	26	65	35.7
室内泊		9	4,413	ティンボチエ		○	1	16	57	35.2
↓		10	1,350	カトマンズ*			10	23	59	夕方測定
↓		11	1,350	カトマンズ*			15	16	55	35.6
室内泊		12	1,350	カトマンズ*			15	20	60	35.5
		13								
		14								
		15								
		16				○晴	※雪			

移動標高と健康状態

移動標高と健康状態

1994.12.11~1995.1.12



屏風岩・東稜から前穂高岳

H6.12/29～H7.1/3

小林喜一（ハイキングこぶしの会）

山崎貴志（富山山想会）

94年正月、左手に火傷を被い逃げるよう上高地を去って早一年。再びアタックしに、ビールを片手にぶら下げる長い道程をあえぎながら横尾冬期小屋に来た。途中清流にいた岩魚、小屋の前にあふれる水、黒い顔に白く化粧した屏風の横顔は何も変わっていないが、暖冬の為か化粧のりが悪いみたいだ。薄暗い小屋には3～4パーティおり、東稜に1パーティ他のパーティも武器からみて屏風に取り付くみたいだ。

12/30 晴れ

3時起床。他のパーティもごそごそ起き出す。出発の時まだ寝ている1パーティを残すのみで一番遅れてしまった。ヘッドランプでトレースを追う。1ルンゼに入り昨年ここを襲った凄い雪崩を思い出し、知らずのうちにピッチが上がる。T4尾根の取付きは相変わらず2～3パーティの順番待ちである。昨夜ここでビバークしていたパーティは東稜に取り付くと言って出発していった。過去ここで待たされた時間はどれくらいになるのだろう。またもや常念岳、蝶ヶ岳の写真を撮る。幸いにも風がなく寒さもあまり感じない。

待つこと5時間半、1ピッチ目小林気合いを入れて取り付く。右上してかぶりきみの所でビレーを取るのに手間取る。アブミで左上してピッチを切る。昨年はもう5桟直上したが、他のパーティは左に巻いてい

るのでここでビレーをする。ユマーリング用のザイル（11ミリ）を固定して荷揚げを行うがザックが引っかかり上がりやすいためにザックをサポートしてもらいつつ上げる。ザックの吊り方が悪いみたいだ。

2P 山崎 ブッシュをつかみながら左を巻いて雪壁を直上。雪の塊や8環まで落ちてくる。

3P 小林 雪のトイ状の所を木登りをまじえて登りプラトーでビレーを取る。蒼穂ルートを登攀しているパーティが見える。

4P 山崎 最後のいやらしい5桟のスラブを登りT4でビレーを取る。T4にはツエルト1張り整地中のパーティが居りT3、T2までピッチを伸ばす。

5P 小林 下りきみのトラバース。しっかりと確保支点が得られずピッケル、バイルを使用する。昨年ビバークしたT3は雪に埋もれていて整地するのが大変だなあと思っていたら、T2の先行パーティよりテラスを分けてくれる有り難いお言葉がありもう1ピッチのばす。

6P 山崎 雪が被いかぶさるような雪壁を登りT2に着く。T2には2張りのツエルトを張ると針の隙間もないくらいで、譲ってくれたパーティに感謝、感謝。先行パーティは昨夜T4取付きでビバークした荒川山の会のパーティだった。

12/31 雪

先に荒川山の会のパーティが取付き、後を追うように登攀開始。

1P 小林 A1 の小ハングを越えビレー。11 ピッチを固定して 9 ピッチで荷揚げを行う。直線なので荷揚げはスムーズだ。フォローはユマーリングを行う。

2P 山崎 A1 で直上。トラバース手前でピッチを切る。

3P 小林 アブミでトラバース。荷揚げ後、山崎もアブミでトラバースをする。雪もちらちら降ってくる。先行パーティのザイルがなかなかのびない。雲稜ルートのパーティは軽快に氷壁をダブルアップスをしている。後で聞くとノーピンだったそうだ。蒼穂パーティもなんぎしているみたいだ。

4P 山崎 IV 級フェースは支点が少なく苦労するが、A1 フェースは雪が着いておらず快適にザイルをのばす。小林がユマーリング中に落石をして後続パーティに当たりすまない事をした。

5P 小林 A1 からフリーのところから薄暗くなり手探りで岩角にビレーを取りテラスにへばりつく。先行パーティはピナクルのテラスでビバークすると言うので、我々もここでビバーク態勢に入る。テラスはふたりがやっと座れる所だがザイルを張り、ツエルトを張れば最高の居住地だ。知らぬ間に水筒、カートリッジがツエルトの角で沈んでいる。外はヘッドランプに照らされて雪がチラチラ降り、下のツエルトの明かりが見える。穏やかな年の暮れだ。来年より明日の 2 ピッチだ、頑張ろう。山崎は靴を脱いでシュラフに腰まで入ったが、小林は靴を履いたままシュラフに入った。この差が後で軽度の凍傷になったような気がす

る。

1/1 晴れのち曇り

元旦のすがすがしい朝日を浴びて 6 ピッチ目、山崎。3 級フェースだがアイゼンでの 3 級が一番難しく感じられる。

7P 小林 ピナクルから A1 フェースに取り付く A1 からフリーへのワンポイントが緊張させられたが終了点でビレーを取ったときはほっとした。いつのまにか目の高さになった常念から蝶ヶ岳の山並。そして眼下に目をやることができた。この上に 4 ピッチの雪壁と木登りが待ち、重いザックにはこたえる。稜線に出る。ふたりは体力、気力とも疲れていたが、先は長いので行けるだけ行く。屏風の頭手前で薄暗くなり、風の吹きさらしの稜線だったがツエルトを張る。パタパタと風がうるさく寝たのか起きていたのかわからない一晩を過ごす。

1/2 快晴

気分は壮快なのだが足が重たい。一步一歩確実に前穂を目指す。8 峰には 3 張りのテントがあり荒川山の会のパーティはサポート隊と合流していた。今日慶応尾根を下るそうだ。さすが北尾根は人気ルートで 6 峰には順番待ちのパーティが見える。この日だまりの中にいたいが今日中に前穂に立ちたいので出発する。下山中の 2 パーティに会い、1 パーティを抜かし 5 峰へ。昨年後ろ髪を引かれるように下った 5 峰である。

3 峰は先行パーティがつながり下山パーティと混雑している。1 ピッチ小林、2 ピッチ山崎。重いザックでは屏風より厳しく感じる。2、3 級の岩稜歩き前穂のピークへ。風が強いため感激も早々に明神方向にツエルトを張る。前穂東壁のパーティがそばでテントを張りだしたのでスコップを貸す。自分たちのビバークサイトは整地しただけ

だが、彼らは整地をして風よけのブロックまであっという間に作ってしまった。彼らは屏風の雲稜を登攀していたパーティで、このあと滝谷に行くと話していた。

1/3 晴れ

吹き上げる風の中、前穂を下り明神岳を目指す。明神岳まで下れば風も弱まり、2峰に取り付く。フィックスロープに掴まって1ピッチ。2ピッチは左の凹角状を行く。ザイルを解いてテルモスのコーヒーを飲む。最高にうまい。天候が崩れるのが気になり先を急ぐ。随所に真新しいペナントが見られ5峰直下にはテント場があり、「つわものどもの祭りのあと」という感じでこの山行も終了が近い事を物語っていた。ガスが迫る中、西南稜を駆け降りる。途中ルンゼにトレースがあったのでルートを変えたら滝が出てきて懸垂をするはめになる。安易にルートを変更するものではないことをつくづく思った。岳沢の登山道と合流して今回の山行を囁みしめて握手をする。アイゼンを外したらボルトが切れてバラバラになった。無事山行を終えられて、感謝。

(小林)

00)屏風の頭手前小ピーク(17:00)

1/2 晴れ

起床(4:20-7:40)8峰(9:30-10:00)6峰(11:30)3・4コル(13:30-14:00)前穂高岳(16:40)直下ビバーク(17:00)

1/3 晴れのち雪

起床(5:00-7:50)明神コル(9:00)登攀開始(9:30-10:15)5峰直下のテン場(11:10)岳沢登山道合流(12:40)上高地(13:40)坂巻温泉(15:50)

12/29 晴れ

魚津(6:00)坂巻温泉(10:20-11:15)ゲート登山指導所(12:00)上高地(13:30)明神(14:35)徳沢(15:40)横尾(16:50)

12/30 晴れ

起床(3:00)出発(4:40)T4取付き(6:20-11:50)T4(15:00)T2(16:00)

12/31 晴れ

起床(3:00)登攀開始(8:00-18:30)テラスでビバーク

1/1 晴れのち曇り

起床(4:00)登攀開始(7:20-11:30)稜線(16:

魚津岳友会

西大谷山
赤谷山

西大谷山

◇片山百合夫(L)、前田佳子、池原等
◇H6.12/23~25

12/23

薄日さす曇り空。朝、佐竹、五十嵐と一緒に分乗する。途中佐伯郁夫・克美の二人をまじえ、一路伊折へ向かう。伊折から先、車が入りそうなのでそのまま進むが、まもなく雪の中で立ち往生となってしまった。皆で押し出して、車だけ伊折に帰ってもらう。ここからスキーを用いるが、我々3名の荷が重く原、佐竹、五十嵐に助けてもらうことになった。当初の計画では、西小糸谷からクズバ山の山頂を直接ねらう予定だったが、サポート隊によるラッセル援助、下山時のスキー利用などを考えて、急きょ東小糸谷からの入山と変更する。

馬場島から先、東小糸谷の源流鞍部直下まで佐竹がスキーで先行してくれた。池原の体調が悪く遅れ気味となり、鞍部に着いたのが1時半になってしまう。その場でテントを設営し、片山、前田の二人で1300㍍まで偵察にゆく。

12/24

今日は終始晴れるが、明日は雨の予報である。西大谷山にアタックを決め、早朝月明かりを頼りに出発する。途中で夜が明け

はじめ、猫又山の山頂に朝日が当たり、少しづつ下に広がっていく。次に大日岳が明るくなり、最後に剣が光りはじめる。何度も足を止めて、見飽きることがなかった。昨日のトレースで高度を稼ぐが、その後のラッセルではかなりの時間をとられてしまう。クズバ山山頂が9時半、1時間半も予定をオーバーしている。目的の西大谷山へは、所々杉など残る入り組んだ細尾根が続いている。しかも立派な山頂ではなく、尾根上的一点にすぎず面白みのない山との印象を受けた。

かなりの時間と労力を要するのと、池原の体調が本物でないので、目的地をクズバ山に変更する。剣、赤谷山、猫又山、毛勝山などの展望。うしろをふり向くと、カスミ谷、大日山谷、山ノ神尾根などが目の当たりに眺められる。周囲の山々を眺めながら、トレースを伝って下山する。テン場に着いたのが2時、冬山を楽しむべくもう一泊とする。

12/25

朝から雨である。昨夜の下界との交信で、佐伯(邦)氏が11時に伊折まで出迎えてくれること。雨の中スキーを付けて下り始めたが、荷が重いうえに雪が腐っている。木々の間の急斜面で、バタバタ倒れてしまう。途中からワカンにはきかえ、スキーを担いでの下山となった。

馬場島での小休止の後、スキーの人となる。避難小屋で休んでいると、北山さんの運転する雪上車が止まってくれた。伊折まで楽をさせてもらった。

メモ

- ・広いゲレンデのないときは、スキーの利用を考えるべきだ。
- ・下界（小杉町）との交信は明瞭だった。
天気予報絡みで交信時間を考えるべきだ。
- ・剣、猫又などのよく眺められる山域である。春に大日まで行けたらと思う。
- ・入山サポート：原勝志、佐竹剛彦
佐伯郁夫、佐伯克美
- ・下山サポート：佐伯邦夫

（池原）

12/23

会館5:10-（車、途中佐伯夫妻が合流）-伊折(6:30-7:00)-小又川出合(9:45)-馬場島(10:00-10:20)-東小糸谷出合810m(10:45)-小糸谷源流鞍部1130m(13:20) テント泊

12/24

鞍部(5:10)-クズバ山1876m(9:40-11:10)下山-平地1620m(11:30-12:30)-テン場(13:50)

12/25

テン場(7:00)-馬場島(9:00-9:30)-避難小屋(10:30-10:45)-雪上車-伊折(11:10)

赤谷山

◇H6.12/31～1/3

◇原、佐竹、黒崎、飯田、五十嵐
サポート：中島、加藤

12/31 積りのち雪

全員つぼ足で行く。途中より雨、雪に変わる。トレースがあり、労せず入山できた。白萩堰堤から、トレースを伝い尾根に取り

「魚津岳友会」

付く。ラッセルなく非常に楽であった。この日、1850m付近にテントを張る（予定では2日目の目標点であった）。

1/1 雪のち吹雪

出発とともに視界、天候も悪きなってきた。1900m付近にテント場のあとがあり休憩。2000m付近で先行パーティと合流。少し先へ行くが、稜線が細く急になり、視界天候とも悪くなつたため引き返す（先行パーティは2000m付近に泊）。

1/2 快晴

昨日のトレースはほとんど消えかけていたが、割に早く2000mへ着く。先行パーティのトレースに助けられ、30分あまりで頂上へ着く。そのまま下山。1500m付近に、別に登ってきた中高年パーティに会う。下へ行くにつれて湿雪になる。馬場島荘にて泊。

1/3

馬場島を8時45分に出発。途中、避難小屋で池原、中島、前田に合流。下山。

※リーダーは、その役割を全うするため、隊員が協力すること。

12/31

伊折(6:30)-取付き(11:30)-1850m(3:30)

1/1

1850m(8:00)-2000m付近(10:30)-テン場(12:00)

1/2

1850m(8:00)-2000m-赤谷山頂上(10:30)-白萩取付き(2:30)-馬場島(3:30)

富山登攀クラブ

黒部別山・南尾根～剣岳・三ノ窓尾根～早月尾根
錫杖岳・前衛フェース 1ルンゼと3ルンゼ
八ヶ岳・広河原沢 3ルンゼ
猪谷川
甲斐駒ヶ岳・黄蓮谷左俣～赤石沢奥壁・中央稜
錫杖岳・前衛フェース 3ルンゼ
猪谷 洞山
唐沢岳幕岩 大凹角ルート
人津谷
中央アルプス・滑川 奥三の沢
八ヶ岳・大同心 正面壁・右フェースルート
・赤岳西壁 ショルダーリッジ・右ルート
・日の岳稜

黒部別山・南尾根～剣岳・
三ノ窓尾根～早月尾根

◇H6.12/24～H7.1/2
◇田畠、北村、上田

12/24 ゲート～黒四～内蔵助出合
内蔵助出合手前の滝のトラバースがいやらしい
12/25 南尾根二段岩峰手前
昨夜からの雨が雪に変わる。岩峰に1ピッチフィックス。
12/26 P5の肩
快晴の中岩稜登攀。トップは空身。計9ピッチでP5の肩へ。
12/27 P2・P1のコル
P4から大切戸の下降25、25、30m。
最後は空中ぎみ10mでコルへ。P3頂稜

部はナイフリッジで小切戸へ懸垂。P2へ
1ピッチ登ると緩やかな雪稜に変わる

12/28 別山本峰～北西尾根～剣沢二俣

途中懸垂一回。なだらかな雪山歩き。時折ヤブ。ガスの切れ間に剣岳、絶景絶景。下降は京都左京労山のペナントがある。

12/29 三ノ窓尾根1850

昨夜から雪。積雪50cm程。雪が止んだので出発。いきなり渡渉。雪崩の恐怖におののきながら三ノ窓尾根に取付く。

12/30 三ノ窓尾根2450

空身ラッセルで核心部手前まで。そこからは全て三ノ窓までロープを出す(一部を除く)日暮れ間近ナイフリッジを削り落としテン場を作る。

12/31 三ノ窓

相変わらずのラッセルで三ノ窓へ。
尾根を登り詰め小窓/王下へトラバースを始

めると雪崩を誘発。後続の田畠、北村がうまる。北村は自力で出たが田畠は動けない。手を振っているので一安心。無事三ノ窓へ、雪洞を掘る。

1/1 停滞

1/2 本峰～馬場島～伊折

快晴強風。先行パーティのトレースをごちそうになり本峰へ。後は早月尾根を下る。

錫杖岳・前衛フェース
3ルンゼ・1ルンゼ

◇H6.12/30～H7.1/1

◇世田、佐野川

12/30 槍見温泉～クリヤ岩舎BC

3ルンゼ 3ピッチ登攀（流水あり）

12/31 P4直上ルートの予定だったが取り付きわからず、1ルンゼに転進。1ピッチプラスα登攀後下降（スノーシャワー頻発）

1/1 BC～槍見温泉

八ヶ岳・広河原沢 3ルンゼ

◇H7.1/8

◇北村

前夜車で舟山十字路まで入る。

7:00 出発。右俣分岐までトレースあり。ゴルジュより3ルンゼ入口滝氷が甘く、右の氷を登って左トラバースしてルンゼに入る（30m N）9:00。

3ルンゼ内ラッセル腰まで。サラサラでひどくもぐる。1、2ルンゼ分岐より雪しまり、膝のラッセル。大滝は50m。ザイル使用。N+。大滝上は左俣より南稜へ抜ける。ミックスで問題なし。13:30～50阿弥陀ピーク。御小屋尾根下降。トレースな

く股下のラッセルでひどい。御小屋山より雪少なくなる。

16:20 車着。天気晴れ。

八ヶ岳・広河原沢左俣～赤岳西壁

◇H7.1/14～16

◇北村、尾谷

三日間で中央アルプス奥三の沢予定をドカ雪で変更。二日間でハツへ。国道148号線北小谷の国道が最初の核心。

翌日、ハツは晴れていた。広河原左俣はトレースがあり楽勝。核心の大滝（15m N）は氷悪く、アンザイレンする。北村リード、ピトン3枚使用。阿弥陀越え、行者にて幕営。冷え込みきつく、夜は-20°C以下。

翌日、赤岳西壁ショルダーリッジに取り付くが1ピッチで敗退。雪多く厳しい。主稜に変更するが、順番待ちで時間切れ。クラ

イムダウン＆トラバースで文三郎へ出る。

中岳、阿弥陀越え、御小屋尾根～広河原沢中央稜下降。トレースもあり最短時間での下降ルートだった。

帰りの道は、またドカ雪。

猪谷川（敗退）

◇H7.1/28

◇杉森

R41常虹の滝より入山、林道から大亦峠から西新山を目指すがルートがわからず本流に入ってしまう。ワカンでひとりでいたずらにラッセルを繰り返し疲れはてて敗退。昨年は大高山南尾根から唐堀山、西新山を目指したが、唐堀からの尾根がわからず敗退。失敗続き。雪のおちついた頃、再々度やる予定。

**甲斐駒ヶ岳
黄蓮谷左俣～赤石沢奥壁中央稜**

◇H7.1/19～22
◇北村他

ブロードピーク遠征のトレーニング。

19日昼までミーティング後、黒戸尾根へ。雪少なく、4時間で登る。翌日左俣へ、雪少なく楽勝。大滝（50m V-）以外はノーザイル、全装備しょって登る。八合目着、12:30。ツエルト泊まり。中央稜2ピッチまでフィックス。夜は寒かった。

翌日中央稜。日当たりよくまるで春山。終了、12:30。

頂上から五合目へ下る。3時前着。翌日七丈瀑予定が悪天候で下山。塩沢温泉で汗流す。

錫杖岳 前衛フェース・3ルンゼ

◇H7.1/29
◇北村

2:30に立山町の自宅を出る。5時前槍見着。雪降っており体調も悪く（睡眠不足とトレーニング疲れ）しばらく車の中でグズる。5:30出発。雪しまっていてラッセルは楽。8:00錫杖沢出合着。

中央稜左ルートのつもりだったが、錫杖沢は水が出ており状態悪い。3ルンゼに変更。登るうち吹雪だし、取付きで迷う。9:00取付き。10:00登攀開始。

夏の1ピッチ目ノーザイル。2ピッチ目からザイル使用。快適な氷雪。3ピッチ目、夏は左のカンテラインだがルンゼ直上。洞穴に入ったとたんチリ雪崩でのかい奴が数発。アブミで越そうとするがあと一步踏ん

切りつかず。1時間迷って下降とする。下山中金沢の友人と会う。渡渉点上部の氷で遊んでいるところだった。混せてもらつて少々ツララ登りを楽しむ。雪降って寒いので風呂は西穂屋に入る。300円也。

錫杖岳 前衛フェース・3ルンゼ

◇H7.2/5
◇北村、上田

前週敗退したので、パートナーを得て完登。3:00 大沢野。4:40 槍見。7:30 錫杖沢出合。8:30 基部。9:00 登攀開始。14:30 登攀終了。

天気、曇り後雪。登攀中よりチリ雪崩ひどし。下降時にはほとんど壁全体がなだれていた。

上田君が足不調のため、北村が全てリード。安心できるビレイヤーで久しぶりにリードを楽しむ。単独ではとても「楽しむ事」はできない。ほとんどがダブルアックス。一部アブミも使用。

状況は前週より悪かったが、今回は全く問題なし。単独では好条件でも敗退した。自分に対し精神的な弱さをつくづく感じた。

猪谷 洞山

◇H7.2/4
◇杉森

前週の続き。今回は庵谷から入る。R41から見える送電線尾根を登高。以外に雪が深くひとりでラッセル4時間で頂上。周囲は360度の大展望。下を見るとR41の周辺が箱庭のように見えた。

唐沢岳幕岩 大凹角ルート

◇H7.2/10~12
◇稻葉、尾谷

三年越しの幕岩。

11日、2ピッチフィックス。

12日、5:00取付き。終了、18:00

12時間に渡る登攀になる。雪が軽くボルトブレイクを取るのに緊張。ダブルアックスでのフリーもあり時間はかかったものの、大変おもしろい登攀であった。暗闇の中下降7ピッチ。大町24時。富山、立山3時半着。久しぶりの24時間行動であった。今度は冬のS字ルート、山嶺ルート、松本ルートをトライ。やはり幕岩はおもしろい。

人津谷

◇H7.2/26
◇杉森

藤橋9時発。人津谷をスキーで登る。前回の山想会のトレースがあり、12時過ぎコルに着く。白越山の予定だったが稜線の多量の雪にめげて下山。下りは吹雪の中をシールを付けて下る。

中央アルプス・滑川 奥三の沢

◇H7.2/11~12
◇北村他一名

何度か計画してその都度つぶれた“オクサン”。憧れのルートについて挑戦する時がきた。しかし二日間ではやはりキツイ。アプローチのヤブコギ、河原歩きで見事にハマる。渡渉多いのでスパイク付き長靴が有効。11日は結局沢取付きまで行けず、

二日目ようやく取付きに着きF1を登る。50㍍ザイル1ピッチでちょうど上の灌木に届く。M級程度。F2までラッセル。F2はたっているが80度程度。M+と見た。が時間切れで基部より引き返す。F1は懸垂。帰路はトレースあり、あっという間に降りる。

二合目敬神小屋まで林道有り車に入る。オクサン以外にも多数の氷あり、みんなで行くべし。

八ヶ岳大同心正面壁右フェースルート 赤岳西壁ショルダーリッジ右ルート 日の岳稜

◇H7.2/18~19
◇北村他一名

ブロードピーク隊のトレーニング。ビバークしてルートをつなげるもスピード不足あまり登れず。

赤岳ショルダーリッジ、日の岳稜はあまり登られていないが内容ある。ルートファインディングが必要。

帰路居眠り運転で死にかける。山で頑張りすぎると、帰りがしんどい。そこが辛いところ。

富山勤労者山岳会

剣岳・小窓尾根

北岳

白鳥山

富士山

四阿山

大乘悟山

剣岳・小窓尾根

◇H6.12/30～H7.1/4

◇堀(L)、山崎、河島、石野

2年前から暖めてきた冬の小窓尾根。今回、中1日の停滞日を使って6日間で全ルートを消化できた。当初予定より一人少ない人数でその分ザックの重量が増したため、スピードがややダウンしたが、全体としては特に大きな問題点はなかった。

成功の鍵は何よりも山行中の天候の把握とその判断であろう。毎回の天気図の作成と地上からの無線による気象情報が大変役立った。また事前のデポ荷揚げや留守本部を中心とした地上からのバックアップなど会の協力があってこそ成功したといえる。

合宿という位置付けとしては、アルパインスタイルとしての目前の個々の障害に対するメンバー各人の総合力の向上、雪岩壁の登攀技術の向上があった。山行中もリーダーの一方的な押し付けをせず、4人が個々意見を出し合い最終的にリーダーが判断するという形態をとり、行動中はリーダー、サブリーダーを中心に4人が一致した。

会としては初めての冬期小窓尾根完全制覇となったが、参加メンバー全員には心地よい疲労と満足感がのこった。そして直前に参加できなくなったメンバー1人には悔しさがのこった。

12/30 晴れのち曇り、夕方より雪

労山事務所(4:00-5:00)-上市駅(5:30)-伊折(6:30)-馬場島(9:00-9:30)-取水口堰堤(11:00)-雷岩(12:00-12:40)-小窓尾根 1650m(14:45)

前日に大島より電話があり、父上が脳出血で入院したため今回は参加できないという。急いで他の3人に連絡し、荷分けのやり直しや車の手配などの打ち合わせを行い、明朝3:00分早めに事務所集合を確認する。

早朝出発前の再荷分けというのは、のんきな堀にとっても初めてのこと。減った1人分の食料を減らし大島が持っていた共同装備を分けると、ことさらザックが重く感じる。

出発が遅れたが、早朝の道路はスキーを積んだ車がまばらに走っているくらいで、30分で上市駅に到着。じき予約してあったタクシーが駅に着いた。伊折までの道に

は雪はほとんどないが、いたるところ凍結しへアピンカーブを曲がる度にタイヤの空回りが身体に伝わる。山深い伊折の里に降ろされ出発の準備をしていると、ライトバンがやってきて目の前の通行止めの鎖を外し車で先へ進もうとしている。「これはしめた！」とばかりに交渉し便乗させてもらった。ライトバンの2人は高岡カラコルム山岳会のメンバーで、車で行けるところまで進みそこでザックを置いて再び伊折から歩いて入るという。我々は車を降りたところからすぐ歩けるわけで、彼ら以上に楽させてもらった。結局歩けば1時間くらいのところまで車で乗せてもらい、徒步は正味2時間くらいで馬場島に到着した。今日一番乗りである。

派出所に入山届けを出しヤマタンを受け取る。小窓尾根には前日2パーティが、今日は我々の後に1パーティが入るという。ここ数日降雪もないでトレースが残っているだろうから、今日は2200㍍までだな！と、ハッパをかけられ出発する。曇り空だが出発としてはまずまずの天気、途中一回の休憩をとり1時間半(11:00)で取水口に着く。白萩川の水量は少なく飛び石づたいに難なく渡渉し、計画通り夏道を行く。川通しに5、6回渡渉を繰り返し、石野を除く全員が白萩川の清流の洗礼をうけ、1時間かけてようやく雷岩に到着した(12:00)。雷岩手前のいわゆるタカノスワリ近くには発生したばかりのデブリを一ヵ所認めた。小窓を敗退してまたここを引き返したくないものである。

大休止の後、重荷も手伝って小窓への急登はゆっくりペースで進む。トレースはしっかりしており雪質も安定している。ただ、天候だけが気がかりで、昼過ぎからは必ず

崩れるはずである。途中二本たてて2時間ほどで1600㍍の小窓乗越に着いた(14:45)。計画書では尾根主稜線上の1300㍍くらいまでのつもりだったので先へ進めた事になる。ちょっと早いが今日はここでテンぱることとし、剣尾根や赤谷尾根をバックに写真を数枚撮っていると、じきガスが湧いてきて一面ホワイトアウトの状態になった。急いでテントを整地しテントに潜り込む。山崎が碇を破って持ってきたウイスキーで皆ニコニコしながら、まずは入山を祝って乾杯。4時の天気図をとる。

12/31 雪のち吹雪

小窓尾根 1600㍍(6:45)- 1800㍍(8:00)- 2100㍍(10:00)- ニードル基部(11:10-11:40)- ドームの頭(14:00)

はたして天候は悪い。雪で視界は100㍍くらい。まるでチンドン屋のようにザックの周りいたるところに荷物をくくりつける河島のパッキングを待ち、6時45分出発する。昨夜からの降雪でトレースはほとんど消え、膝ぐらいまでのラッセルである。早めにトップを交代しながらやせ尾根を進む。2100㍍ピークに先行パーティのものであろう幕営跡がある。ニードルへの急な雪壁を登り11時10分ニードル基部に到着、1600㍍乗越から4時間半かかった。これから岩稜にそなえ、ツエルトを羽織って大休止とする。天候はほとんど吹雪の状態だが視界はまだ50㍍くらいある。ツエルトとテルモスのコーヒーで一時身体は暖まるが、その反動でことさら寒さがこたえる。30分の休憩の後行動を開始。まずは、やせた岩稜を1ピッチフィックスする(30㍍)。そこから残置フィックスを使い10㍍でニードルの肩まで進む。肩では雷鳥の夫婦が何羽も我々を出迎えて

くれた。肩からは池の谷側をアンザイレンで下降気味にトラバース（20㍍）。ドームとのコルへはノーザイルで降りた。途中先頭を行く河島が進退きわまって立ち往生し、うしろの山崎に尻をつかれる。コルからドームへは60度を超える急雪壁を池の谷側ヤブを利用して登る。トップは崩れるステップを踏み固めながら進むが、崩れる雪がチリ雪崩となりラストまで皆同じようにステップを作りながら登る。

1時間ほどでようやくドームの頭に到着した。ドームの池の谷寄りに整地したテント場があり、これからどうするかを話し合った。時間は午後2時、まだ1、2時間は行動可能であり、明日明後日のことを考えればなるべく先へ進みたいところであるが、これから先にはこのドームの頭以上の幕営適地はない。それに、もし敗退するとなればこれより先からの撤退は困難を究める。ちょっと早いが最も安全な選択肢としてここでテンばることとした。4時の天気図を取ると低気圧が発達しながら本州から太平洋を東進しており、明日も完全に冬型である。

テンばってから、夕方6時の留守本部との定時交信までにさっそくテントの周りの除雪をした。留守本部と交信しているとブレイクが入った。京都の伊藤達夫氏からである。明日以降の天候が悪いので八ツ峰から急いで早月尾根を駆け下り、現在早月の1900㍍くらいにテンばっているという。1日に剣のどこかで落ち合おうと思っていた堀にとって驚きであった。さすが伊藤君！天候の読みは鋭く先を見越した行動には脱帽である。さて我々はその悪天候につかまり明日どうするか、その判断は明日早朝決めることとし、とりあえず朝までテントと

周りの除雪に精を出す。

1/1 吹雪

停滞 トレース・フィックス工作

1995年の幕開けである。ラジオからは全国の正月の様子、特に東京をはじめ太平洋側では快晴ですばらしい初日の出を拝めるでしょう…としゃべっている。こちらは全くの吹雪で昨夜からすでに1㍍以上積もっているのに。

朝8時の交信で留守本部に正式に停滞を告げる。特にすることもなくコンロで暖をとるがじき炎の状態がおかしくなりテント内の酸欠を告げる。交代でせっせと除雪するのか唯一の仕事となった。それにしても降雪はすごい。みるみるうちに積もっていく。ためしに尾根上をちょっと歩いてみると胸近くまで雪がくる。明日は進むにしろ退くにせよラッセルが大変であろう。もし停滞が長引けばガソリンも不足するので火を消してふるえながらラジオの正月番組を聞いて過ごす。9時の天気図では太平洋の低気圧は発達しながらどんどんスピードを増して東進している。大陸の寒気を持つ高気圧はあまり動いていない。この調子なら明日は晴れるであろう、と堀は予想をたてる。明日の行動をどうするか？皆の意見を出し合うが、3人とも進むか退くかいずれともはっきり決めかねていた。

天気予報では堀と気象担当の山崎との意見は一致していたので、リーダーの提案で昼一時から明日のためにルート工作にいく。ピラミッド基部までの約500㍍のやせ尾根は胸までの泳ぐようなラッセルで進み、ピラミッド基部からは1ピッチフィックスする。ザイルフィックスには当初二人が反対した。河島は明日も冬型のこんな天気だから敗退するときにまた外しに来なければ

ならないいという。山崎は、吹雪の中に一晩中ザイルを置けばカチンカチンになりフィックスしても役に立たなくなるという。堀は、山崎には吹雪の中でもビックルートでは前日のフィックスを含めたルート工作は常套手段であることを、河島には科学的な根拠もなく明日も吹雪になるというのはおかしいと批判した。明日少しでも時間を短縮しようという堀の意見を押し切り、結局、山崎がフィックスの作業をかって出てくれた。山崎が登っている間、河島は尾根をテントまで往復しトレースの地固めをした。約2時間でテントの作業でテントに帰り、再びテントの周りの除雪に精を出す。

夕方7時の定時交信で今日の様子を伝え下からの気象情報を聞いた後、無線を切ろうとするとまたブレイクが入った。「こちらは馬場島、横浜カタツムリ山想会です」と。我々が小窓尾根にいる様子を察し割り込んできたもので、彼らの会の別パーティが小窓尾根の小窓の頭に居る旨伝えてきた。明日6時の彼らの交信を我々も傍受することを伝え交信を終える。先行パーティがまだ小窓尾根に居ることがわかったので、トレースが期待でき明日の行動は少しは楽になる。明日は前進！と皆で確認し早々に就寝する。

1/2 快晴

ドームの頭(7:25)-ピラミッド基部(7:40)-ピラミッド上部(ナイフエッジ終了)(9:40-11:40)-マッチ箱基部(12:00)-マッチ箱の頭(14:00)-小窓の頭(14:30)-ジャンクションピーク(14:45)-小窓の王(15:20-15:40)-三窓(16:00)

4時の起床で石野は外を見て「わー星が出てる！」と歓喜した。みな活気づき朝食、出発の準備と忙しい。6時には横浜カタツ

ムリ山想会と交信を傍受するが、先行パーティの無線は確かに電波は出ているのだが音声がまったく聞き取れない。我々が馬場島との間にに入って中継してみるがやはりだめ。結局彼らは一方通行のモールス信号のような無線交信をしていた。

日の出とともにに出発するぞー、といいながらまた河島のチンドン屋パッキングがてこずり、結局7時半前に出発。ど快晴の中、真正面にはマッチ箱が巨大な姿で目に入り、米粒ほどの二つの点がその斜面に取り付いている。おそらく今朝モールス信号の交信をしていた横浜カタツムリの2人パーティであろう。苦労して付けた昨日のトレースも完全に消えていたが、それでもないよりはましで、膝ほどラッセルですんだ。

昨日フィックスしたザイルも凍ることなく我々を待っていてくれた。堀トップで登り、次に石野がユマーリング登攀、サード山崎もユマーリングしラスト河島を確保し迎える。先行2人はそのまま先へ進みルート工作を先行する。2ピッチ目は白萩川のクーロアール状急雪壁だが堀、石野はノーザイルで通過。3ピッチ目はテラスから灌木帯を30㍍登り大きなチョックストンを越す。そこからは緩く左上する10㍍のナイフエッジ（文字通り股咲きエッジ）をまたぎながら通過する。まっ快晴で両サイド切れ落ちたナイフエッジの高度感は最高である。ナイフエッジ終了ぎりぎりでピッチいっぱい40㍍、その後10㍍ほどの険惡な岩稜は慎重にフリーで越す。緩い稜線に降り立つところで堀は突然両足がすっぽ抜け、急いで横の確かな雪上に逃げ上がった。雪庇を踏み抜いたのである。幸い、そこだけの小レンゼにできた雪庇で、周りに灌木があったので雪庇が崩れ落ちずにすんだ。

安全場所にザックを置いてホッと一息つき、踏み抜いた自分の足跡の穴をあらためてのぞき込んで背筋がゾッとした。30分してセカンド山崎が登ってきたので、雪庇に注意するよう伝え、堀はラッセルでトレースを先へすすめる。12時にマッチ箱基部に全員集合、ここからやせた岩稜の尾根を2ピッチザイルフィックスで進み、小岩峰から残置フィックスされた急斜面のクロールを左から右に巻くように登る。50㍍ほどのやせ尾根を雪庇に注意しながら腰までのラッセルで進むと小テラスがあり池の谷側を巻くとマッチ箱肩の大斜面に入る。ドームの出発の時に見えていた先行パーティは、斜面の左側、西仙人谷に落ちるルンゼの肩にテントを張っていた。こんな怖いところでよく一日停滞していたものである。斜面は春同様にクラストしており完全にアイゼンの前爪とバイルの世界である。ノーザイルなので一步一步慎重にステップを決めながら登る。午後2時マッチ箱の頭に到着、ようやく危険地帯を通過した。

小窓の頭を過ぎ、北方稜線が眼下に見えたところで今期初めて他のパーティと身近で会った。明治学院大学のパーティで、赤谷尾根から入山し北方稜線を攻略してきたという。彼らも入山して初めて他のパーティに会うらしい。登攀具をかたずけている彼らをねぎらい、我々は先に進む。北方稜線との合流部のピークで休憩とした。三ノ窓やチンネがすぐそこに見え、河島カメラマンは大忙しだ。小窓の王の肩から1ピッチ懸垂で降り、午後4時三ノ窓に到着した。

今日三ノ窓に幕営するのは3パーティである。堀以外の3人はさっそくデポ缶の回収に取りかかるが、ジャンダルム基部の池の谷側にある小洞穴にデポしたものだから缶

が完全に氷で埋まり、エビのシッポまでできている。山崎がバイルで氷を削り割り、苦労してようやくデポの二缶を掘り出した。その間堀はテントの整地をし、日が沈む直前の5時前によくテントに入ることができた。

今朝からラジオが故障し中波番組が入らないので、となりの明治学院大のテントに4時の天気図を見せてもらい、お礼にお酒を差し入れた。7時半の留守本部との交信で地上の天気情報も流してくれた。どうやら日本海南部に新たな低気圧が発生している。この低気圧が発達しながら北上する模様で、一方大陸の高気圧は相変わらずゆっくりペースなので、このままでは明日の昼過ぎから天気は荒れそうである。まーそのころには早月尾根の危険地帯を降りているだろうから、あまり心配はしなかった。デポのお酒で乾杯しリッチな夕食すき焼きを作るが、堀は疲れと空きっ腹にアルコールが入ったためにまるで二日酔いのように気分が悪くなり食事を全く受け付けない。皆さんに食べれるわけでもなく、沢山のデポの食料はわずかしか利用できなかった。明日以降のためにデポのガソリンと行動食を分け、残りはまた缶に詰め直した。着いた時間が遅かったため就寝時間が9時になってしまったが、全員朝までぐっすり眠った。

1/3 晴れ昼前より雪のち吹雪

三ノ窓(7:45)-池の谷乗越(8:30)-長次郎のコル(9:30-10:10)-剣岳本峰(10:40-11:00)-早月尾根2800㍍(13:00)-2600㍍(14:00)-2400㍍(14:40)-早月小屋(15:00)

今まで起きたのが4時が待ち遠しかったのに、今朝は目が覚めず起きたのが4時45

分になってしまい初めての寝坊をした。

寝坊の分だけ出発が遅れ、3パーティでは我々がどん尻で7時45分。池の谷ガリ一はラッセルの必要は全くなく、半分以上は完全にクラストしている。45分でガリ一を登り晴れわたる北方稜線をるんるん気分で南下する。トレースもしっかりと、視界も良好、途中クラストした岩稜が不慣れな河島から山崎にトップ交代した以外何の障害もなく池の谷乗越から1時間で長次郎のコルに到着し、先行の2パーティにも追いついた。先行はコルから本峰への急雪壁の登りにザイルを出しておらず、そのザイル操作も実にのんびりしたもので、我々は1時間近く待たされた。本当はノーザイルで行くつもりであったが、2番手の明治学院大のメンバー一人が急斜面に取り付く前に滑落してしまった。幸いザイルフォローがあったので5㍍ほど滑って止ましたが、それを見ていた山崎が我々もザイルを出そうと言った。堀の脳裏に、もし誰か滑ったら、サブリーダーがザイルを出そうといったのにリーダーはそれを無視したために滑落死した、などと言われたくないなー、という身勝手な考えが浮かんだ。素直に山崎の意見に同意し、ようやく我々の番。4人ともすんなり斜面を登りきり、それからじき本峰の祠に到着した。

小窓から本峰へ感動の一瞬のはずであるが、天気はすでに悪化していた。手短に写真を撮り、のんびりくつろぐ明治学院大の一一行を放って急いで下りにかかった。ここでの順番の入れ替わりがこの後我々に幸いした。すでに弱い風と雪が舞っているが、このくらいならカニのハサミやシシ頭の通過に支障とはならない。が、むろんいずれでもザイルを出し慎重に下降した。2時間

で一応の安全圏2800㍍に降りたが、堀は途中何度かパーティ編成から遅れる河島を怒鳴った。急斜面を何度もザイルで懸垂し、安全圏といえる2600㍍まで降りた頃には猛吹雪でホワイトアウトの状態であった。たたきつける吹雪で目も開けられず、ホワイトアウトの状態でトレースもほとんどわからない。4人の八つの目を総動員して慣れ親しんだ早月の地形と方向の記憶をもとに勘で進みなんとか小屋までたどり着いた。この2600㍍から小屋までの1時間がこの山行中のなかで最も緊張し神経を使った時間であった。

とりあえず吹雪を避けるために小屋の入口に入ったが、常駐の県警から小屋で泊まっていたら・・・と甘い誘惑があり、気が付くと4人ともヤッケと靴を脱いで部屋に入っていた。素泊まり4千円だが、乾燥室のストーブはガンガン使えるし、水もため水だけ好きなだけ自由に使ってよい。なんと夕食時にはビールとつまみ、イカの炒めもの、それに塩シャケもごちそうになった。恐縮しながらもありがたく頂戴し、もう下界に降りたような気になっていた。

その夜は一晩中ものすごい吹雪が続き、言い訳だがとてもテントを張れるような天候ではなかった。夕方8時過ぎにヘッドランプをつけて転げるようにして降りてくる登山者がいた。ブナの会（労山、東京）で、疲労とタイムオーバーで雪洞を掘ったが、サラサラの雪でつぶれてしまい、取るものもとりあえず小屋に逃げ込んできたという。彼らの話では2600㍍くらいで若いメンバーのパーティを追い抜き、そのパーティは2500㍍あたりで雪洞をほっていた、という。明治学院大のパーティで、やはり彼らは小屋まで降りてこられなかった。本峰

で彼らより後に出発していれば今の彼らは我々であったかもしれない。乾かすものは全て乾かし、広い部屋に4人ゆったりと（シュラフの中で足をのばし）寝た。

1/4 雪時々吹雪のち雨

早月小屋(7:15)-1900mベンチ(8:45)-馬場島(10:50-12:50)-伊折(15:15)-上市(15:45)-労山事務所(16:30)

早々に出発の準備もでき、起きてきたブナの会の人（村山氏）と話をする。彼らは黒部川から入山し内蔵助平より源治朗尾根を登攀し早月を降りてきたという。会ではもう1パーティが北方稜線に入っており、昨日三ノ窓入りしているはずだが、連絡がとれていないらしい。何かあったらお手伝いしますよ、と我々の無線コールサインを知らせ彼らのコールサインを聞いてから出發した。

出発時間は7時14分。天候は雪だが昨夜からあまり積もっていない様子。それに標高が低い分だけ雪が非常に重たく、10mも行かぬうちにワカンをつける。トレスは所々わずかにわかる程度で、木の生えた尾根筋にルートをとっていく。それでも何度もルートを踏み外し、ペナントを見つけて修正する。ラッセルも1900mのベンチまでで、雪もそれ以降は雨に変わった。途中三回の休憩ののち、小屋から3時間半でようやく馬場島に降り立った。

派出所に下山届けとヤマタンを返し、他のパーティの情報を入手する。現在で7パーティがまだ下山していないという。我々は先ずは馬場島山荘で留守本部や家族に下山報告をし、ビールで小窓尾根制覇の乾杯をした。ここでも山荘の主人、酒井氏から煮ものとかぶら寿司、ミカンをごちそうになった。

2時間もの休憩の後、石野はスキーで、残り3人は1台のソリに交代にザックを乗せ、雪上車の足跡を伊折に向かった。（堀

北岳

◇H6.12/29～H7.1/1
◇吉田(L)、筒井、池田

今回はじめて富山勤労者山岳会の一員として冬合宿に参加したが、山域やメンバーの決定、準備に至るまでいろいろと曲折があった。しかし、それはこの会の自由闊達な会風の現れであり主体的、自発的登山を目指す労山の一員として肯定できるものであった。

私は日程が組みやすいこの“マークスの山”にベストで望むことができたが、本来の会の合宿からすると目的、目標がはっきりとせず個人山行の域は脱しきれなかったまた、この山域は、比較的天候が安定しているため、冬山初心者の多くに参加してほしかった。“元旦富士山からの初日の出を見る”、“会友の親睦を深める”という目的は果たせたが、登頂できなかつたのが残念であった。ただ、富山からは南アルプスというなじみの薄い山域での気候、風土などの知識や経験ができたことは、ALL ROUND のクライマーを目指す人にとってプラスになったことであろう。

12/29 晴れ

仕事納めをし、家に帰り、パッキングを済ませ、風呂に入るか、夕飯を食べるかと思案していると池田さんがきた。おかげをかき込み出発である。

途中、立山インターで今回残念ながら不参加となった本堂さんの共同装備をもらい、

朝日インターで筒井さんを待たせ、結局 2 1:20 頃出発となる。深夜でも白馬あたりはスキーパーで賑わっていた。夜叉神峠へは翌 2:10 頃到着した。駐車場はいろいろな所のナンバーの車でいっぱいであった。即、テントを張り、仮眠した。

12/30 晴れ

昨日からの運転からか機敏に起きられない。それでも一応 8:30 頃出発した。『この暗い道は何だろうか・・・』の長い夜叉神トンネルを抜けると神々しい白峰が見える。日本海側とは全く違う空気は乾いているが寒い。スーパー林道から鷲住山へ、そして野呂川への下りは土と氷のミックスに落ち葉が積もって非常に悪い。早くからアイゼンを付けるべきであった。やっと‘あるき沢橋’まで来て既に 12:50、日没までに池山小屋は難しい。16:10、2100m 地点の樹林帯で本日の打切りとする。積雪は 20cm 位できれいな雪が少ない。水を作る際には私の持参した濾紙が役に立った。年末で、FMは懐かしのニューミュージックがオンパレードで流れている。それぞれの青春時代を想いバーボンを飲み干しながら夜は更けて行った。

12/31 曇り後小雪

天気が悪い。どちらにしても今日はボーコン沢の頭までなのでゆっくりと出発である。この時期はラッセルもなくトレイルもしっかりしている。池山小屋でフライをデポした。2600m くらいで寒冷前線が通過し少し風が出てきたようだ。14:20、2750m、ボーコン沢の頭手前の森林限界で幕営とする。早速、酒を出し昨夜の続きとなった。紅白歌合戦をききながら酔いが回りいつしか寝ていた。星空であったが夜中過ぎからテントをたたきつける猛烈な風で

熟睡できなかった。このとき、低気圧が三陸沖にぬけ発達していることは容易に推測できたが実際の気圧やスピードなどのデータはAM(NHK第2)がとれなかったので天気図として記録できなかった。(この時点で冬型が長引くと判断してしまったが、実際には長続きしなかったようだ)

1/1 地吹雪のち晴れ

5 時には目が覚めたが相変わらずテントをたたきつける風である。ただ星はでている。6時30分すぎるころ、東の方が茜く染まり元旦のモルゲンルートである。躊躇したが、とりあえず出発することにした。富士山のちょうど左方より 1995 年第一日目の太陽が昇った。猛烈な風に向かいラッセルを 50 歩するとボーコン沢の頭になる。ここからはほとんど顔を下に向けての歩伏前進である。風のスナイパーから身を守るようにケルンの陰に隠れる。正三角形の耐風姿勢と歩伏前進とをくりかえし目標の露岩まで到達するのに 30 分はかかる。普通なら 5 分でいけるだろう。今日の北岳は誰一人うけつけない。白光に輝くバットレスは遙かであった。また農鳥岳、間ノ岳からも雪煙が何十メートルにも昇り、冬本来の顔を如何なく見せてくれた。このままでは体温低下は必至だとおもい撤退期限を 10:00 としたが、風は一向に衰えず撤収下山とした。樹林帯まで降ろしたら風の影響はほとんどなくなった。野呂川林道にて露営する。

1/2 晴れ

登って来た道を下る。鷲住山を経て、夜叉神峠駐車場。途中、芦安鉱泉まで石川労山の 4 人を私のトラックの荷台に乗せてあげた。その人達も途中で引き返して來たそうです。

問題点

・予備日の使い方について

2日はあった。1日停滞すれば結果的には頂上へ行けたが、確実な気象情報もなく、山以外の予定もあり3日か1日にアタックできなければ下山するしかなかった。あくまでも予備日は非常時の時間に当てたかった。

・装備面での問題点について

他パーティと比べザックが重かった。他パーティはほとんど赤布や輪かんは持っていないかった。ザイルは30㌢で十分であろう。酒は非常に難しいが、本来ならもっと減量すべきであろう。

・その他問題点

アプローチが長い山行ではドライバー&登山は非常にご苦労である。機動的なマイカー登山では負荷を分散できる車で行くことが大切である。

例) ワゴン、オートマチック、4WD、全員免許証携帯、任意保険特約なし・・・など。

(吉田)

白鳥山

◇H7.1/29

◇宮崎(L)、吉田、川端、青山、筒井
鈴木、中村、嶋本

事務所を予定時刻より約20分遅れで出発。上路の登山口(十二社)で筒井氏と合流。神社境内横の川を渡り、杉林を抜けてからすぐに藪のうるさい急登となる。尾根に上がり、高圧電線の鉄塔を過ぎてからも、結構藪が深い。山スキーを持ってきた青山、吉田両氏は背中のスキー板が藪にひっかかる苦しむ。藪も深かったが、積雪が1㍍以上もあり交代のラッセルも結構きつい。

711㌢ピークへは予定時間より1時間以上も遅れて到着した。ここから尾根伝いに見える881㌢ピークまでは、かなり離れているように見えたが、藪も少なくなって吹きさらしになっているためか、雪もややしまっており、30分ぐらいで881㌢ピークに到着。さらに、尾根を登って900㌢付近(筒井氏の高度計による)まで来たところ白鳥山山頂付近の小屋が遠くに見えたが、風も強まりはじめており、尾根の雪も深く山頂まであと2時間ぐらいかかるとの判断から白鳥山登頂を断念する。

少し遅れてきた吉田氏を待って、全員でフライシートをかぶって昼食をとる。車座になってフライシートの端をお尻に敷くと、テントのようになって冷たい風もほとんど入って来ず快適である。

一小時間ほど休んでフライシートの外に出ると、外は吹雪になっていた。離れないようにと声をかけ合い下山をはじめた。山スキーの青山氏は100㌢程下った所までスキーで来たものの吹雪で前が見えず、すぐにワカンにはきかえる。吉田氏もスキーを背中にショットの下山である。

881㌢地点までは視界のほとんど無い吹雪の下山となり、上りのトレースはほとんど消えていた。上り同じコースを下り、やく2時間で登山口の上路・十二社前に到着した。十二社の境内で靴を脱ぎながら「山スキーは3月までやらん。この時期は雪が深くてあかん」と青山氏。「それにしても、途中で引き返して今日は良かった。」とはリーダーの弁。無理をして山頂を目指していたら、下山は結構つらかったかもしれない。

帰りは筒井氏の案内で国道沿いのモーテル風の看板どおりに小路に入り、境鉱泉で

入浴。ひなびた湯治場というよりも、地元の素朴な銭湯といった感じで、女湯からはおばちゃん達の甲高い話声が絶えない。たまにはこんなお風呂も良いのもである。

富士山

◇H7.1/14～16
◇池田、本堂、他

1/14 雪のち晴れ

魚津 I C(4:45)-河口湖 I C(10:52)-馬返し登山口(11:25)-佐藤小屋(14:33)テント泊

1/15 晴れ風強し

佐藤小屋(8:40)-八合目神社(12:06)佐藤小屋(13:27)-馬返し登山口(15:53)-河口湖 I C-駒ヶ根 I C-新太田切発電所前バス停テント泊

1/16 晴れ

太田切川のある沢にてアイスクラミング-駒ヶ根 I C-中津川 I C-高岡市-富山市

馬返し登山口には雪は全くなく、三合目から堅く締まった雪となり、登山道が氷におおわれ始めアイゼンをきかして登った。15日は朝から風が強く出発が遅れた。佐藤小屋からしばらく登ったところから森林限界となり、山頂まで氷結した雪におおわれ、所々に岩石、岩壁が出ている。おもに夏道を登る。風が強く、砂、冰雪を巻き上げ、襲いかかった。八合目神社でリーダーの下山の声がかかり、富士登頂はここで終わった。

帰りに中央アルプスの太田切川の沢にてアイスクラミングを楽しんだ。

四阿山

◇H7.1/28～29
◇池田(L)、本堂

1/2 曇りのち晴れ

立山 I C(4:45)-上越 I C(9:35)-菅平スキーフィールド着(13:15-15:30)-四阿高原ホテル駐車場(16:40)-テント張(17:05)

1/29 晴れのち雪

テント場(7:42)-四阿山山頂(11:15-12:18)-テント場着(14:20)-駐車場発(15:00)-立山 I C(21:20)

菅平スキーフィールドに予定より早く着いたので、スキーフィールドでテレマークを楽しんだ。

四阿高原ホテル以降除雪されておらず、ここで車を捨て、5分程いったところでテントを張った。29日は朝から快晴だ。しかし、昨夜は12時頃まで酒を飲んだために二日酔いで体調は最悪である。

四阿山へはなだらかな斜面が延々と続き、人がよく入っているせいか、はっきりとしたスキーブレーキがあり、それを辿り山頂に立った。眺望は最高だ。

初のテレマークスキーツアーで、ゲレンデしか経験がないため、自然の雪では全く滑れず何度もこけて、下の牧草地にてて締まった雪となり、ようやくテレマークターンをきめることができた。

大乗悟山

◇H7.1/22
◇青山(L)、宮崎、中村、池田い、他

あいにくの雨降りだったが、行けるところまでということで、傘をさして出発。長い林道歩きで、むしろクロカンスキーに適

したコースだった。稜線近くのあずま屋で
ジャンダルム山岳会の方が手際よく作った
豚汁をごちそうになる。帰りは急斜面を藪
につかまつたり、尻セードをしたりして下
る。ひなびた割山集落が印象的だった。

高岡ハイキングクラブ

剣岳・早月尾根

燕岳

裏六甲・不動岩 フリークライミング

剣岳・早月尾根

◇H7.1/1～2

◇作井(L)、佐藤、穴倉、中島

作井(L)より 12/31 出発を、天気が崩れて停滞になりそうなので、1日延期して 1/1 AM 3:00 市役所出発に変更するとの連絡入る。

12/31

天気予報では、1/1 は西高東低の冬型気圧配置で山は荒れ模様と報じている。

1/1

家を出るとボタン雪が舞い落ちておりやはり大雪のようだ。しかし、高岡に雪はない。忘れ物を取りに戻り、15分遅刻してしまった。

市役所を 3:15 出発。穴倉さんの車で一路伊折部落へ向かう。上市過ぎから小雪が降っている。伊折部落の終点にはチェーンゲートがあり通行止め。空き家の前に車をデポする。積雪約 30cm。

身支度をして 5:10 出発。前日のトレイスが薄く残っているものの林道をヘッドランプを付け、つぼ足で交代しながらラッセルする。剣センター、北電避難小屋を過ぎどんどん進む。先頭になった者はペースが早くなり、重荷で追いついていくのに大汗

をかかされる。小又川橋付近より雪は膝までとなり、発電所の作業トンネルを通り、休憩なしで馬場島へ 7:40 到着。9キロを2時間30分、すっかり足の付け根が痛くなつた。

大休止をとり飯を食う。佐藤さんは寒くてフーフー息をしている。作井は、警備隊へ入山の挨拶にいき情報をもらう。上方は雪が少ないとのこと。無線は常時オープンしているとのこと。ヤマタンを各自もらって首にかける。

8:10 馬場島(760m)発。ワカンを着け、穴倉さんを先頭にラッセルに入る。松尾平前の平 9:20 着。一本取る。松尾平泊の2名に追いつき抜く。佐藤さん先頭でラッセル。少し行くと先発の下山者6人に会う。そのパーティより「トレイスあげちゃう」と言われ「ありがとう」と礼を言う。

10:00 一本取る。そのうち急登にさしかかるころ階段どころかスペリ台になっているではないか。10:25 穴倉さんが「足が滑るのでアイゼンを履こう」と言い、3人は履き替える。私はワカンのまま進む。ついにストックのロックも壊れ、ふんばりがきかず、アイゼンに履き替える。下山者が尻セードでスペリ台をつくり、それを登るのにバテさせられる。

10:45 1400m 一本取る。尾根には所々杉の大木があり、平らでテント一張りくらいは十分に張れる。佐藤さん、作井はどんどん登っていき、すぐに離されていく。そのうえ睡眠不足も加わり、カメになった私に後ろから穴倉さんがついてくる。

12:30 1700m 立山側へ間違い尾根が延びている。下り注意！さらに登って大杉の枝に被われたペイントマーク付き岩が露出しており、その辺でテントを張ろうかとなつたが、危なっかしいので、もうちょっと頑張ろうと、また登る。気力だけで一步一歩あえぎながらの登高だ。

13:45 1900m ちょうど整地してあった所があったのでテントを張ることに決める。小雪が舞っており、上部はガスで白い。テントに入ってさっそく作井持参のビールを回し飲み。生き返る。ガスコンロをたいていると目が痛くなったり、鼻がつんづんする。みんな肩で息をしている。生ガスが出ているようだ。予備のヘッドに替えるても同じ。ダメだ。火が全体に回りきっていない。酸欠か？ ランタンは大丈夫。どうも今回イワタニとEPI寒冷地用のボンベの相性が良くないらしい。コンロをあきらめ、ランタンのフタをめくり、その熱でコップヘルの雪をとかすことになった。4人の体熱とランタンの火でテント内は寒くはない。ランタンの火では生ぬるい湯にしかならず、それを五目α米に入れ、またカップラーメンを作る。なんとか食べられた。

外から「小屋の者ですが、どちらの会の人ですか」と問われる。警備隊の人がわざわざ点呼に下りてこられたのだ。ご苦労様。作井、横になり一眠りされる。

18:00 下界の中村さんとトランシーバーで交信する。メリット5。現在位置と状況、

天候等ラジオでも天気予報を聞き、PMから良くなりそうと伝えている。

三ノ窓の雪洞にいる登攀クラブと馬場島が交信している。こちらから富山労山の小窓隊を呼んでみるが応答はなかった。

ランタンの火で水を作るのに時間がかかり、テルモスに水を詰めたり、穴倉さんが「体に水がいらなくなるまで飲もう」と言うので、酒を飲むのも忘れ、寝たのは21:00になった。全員熟睡。ぎゅう詰めて寒くはなかった。また風でテントが揺さぶられることもなかった。

1/2

4:00 起床。さっそく水作りにはいる。朝食はコーンスープと佐藤さんおすすめのおしるこ。ぬるめのお湯を注いでいただく。アタック用具をザックに入れてテントを出る。空には星がまたたいて富山平野の灯がきれいだ。

無風。-5℃、新雪20cm。6:00 アイゼンをはき、ヘッドランプを付け、新雪に被われたうすいトレースに従って軽い雪をけちらしてまず小屋へ向かう。だんだん空が白け始め、小窓尾根、剣尾根の姿がはっきりわかる。剣の岩場の白黒のまだら模様。毛勝三山の真白い頂を左手に、右手には木々の間より大日の白きたおやかな峰。晴天！絶好のアタック日和だ。7:25 早月小屋着。昨日のお礼を言い、ジュースを買って水分を補給する。一休み。積雪はトイレの屋根下くらい。小屋の周りには11張りのテントがある。エスペースばかり。ジャンボも一基。先行者の姿も見えトレースはバッチリ。これからむき出しの尾根に入るので目出帽を被る。ストックをデポし、ピッケルにする。

8:00 小屋発。左手、池の谷側は雪ベッタリのスロープ。右手は木の枝にビッチリ雪の付いた尾根に行く。時々風が出て帽子、目出帽だけでは頬が痛くヤッケのフードでしのぐ。2300位くらいでテントを張った跡がある。佐藤さん先頭になりフィックスロープが下がっている岩場で先行パーティに追いつく。立山川の方がガケ。2400位で池の谷側に下山時ガスると間違いそうなおねが延びており、さらに進むと一つの尖ったピークを乗り越しコルに出た。次は左手でフィックスロープをつかみ、右手でピッケルを使ってよじ登る。少し行くと20位くらいの急岩峰には先行パーティ30人くらいが数珠つなぎで取り付いており、雪はなく、なかなか進まない。じっと待っていると風が冷たい。ふたりは寒そう。温度計は-15℃、2600位付近。暇なので景色を眺めて、一人感慨にひたる。長次郎の頭には3人立っているのが見える。もう少しやな！一方弥陀ヶ原方面を見ると、太陽の光で銀色に輝いており、室堂ターミナルも見える。あんな誰もいない原っぱをとぼとぼと歩いてみたいの一と…。

10:15 この調子だと先行パーティは40～50人くらいで、この先の核心部でまた待ち時間があるだろう。「時間切れ」ということで下山することになった。テント組は昨日停滞して今日一齊に頂上を目指している様子。下りはアイゼンをひっかけて滑落しないように慎重に下りる。11:50 小屋着。ビール大1、ジュースを買って喉をうるおす。12:00 小屋発。テント場を通って展望台へ行くと、警備隊の人が「早行って来たのか」と言われる。「途中で引き返してきた。馬場島まで下ります」と言って通り過ぎる。もう一度振り返って、作井、晴

天に映える剣の勇姿を写真におさめ、お別れする。12:45 テン場着。

正月の早月尾根に一条の踏跡を残し、無事山行を終えた。

燕岳

◇H7.1/2～4

◇竹田（L）、大塚、上田、室谷、上野
伊勢、谷野、荒俣、広林、鹿島、松川

「イタ～イ」

谷間に絶叫音がひびきわたる。ふりかえると、苦痛にゆがんだ顔が…。

高岡ハイキングクラブ宿泊正月山行も今回で連続4回目。3年前の正月に歩いた、その同じ道を再び歩き中房温泉にむかって進んでいた。が、その歩みは遅い。いつものごとく、上野、伊勢コンビはメンバーのハイペースについていくことができず、ふたりは雪の積もる車道を（冬通行止め、12.5キロ）を…。

最初は並んで歩いていたのが、上野遅ればじめる。道中食べた昼食のパン、それに食あたりしたと、ゲーゲーあげだした。そのパンというのも、道中おすそ分けで、私も食っているので私にも症状があらわれるかと思いつつ、その兆候はない。彼のいうことでは、そのあとで食べた方がたぶん悪かったとの説明。しかし、そのあげかたは普通ではない。そして、冒頭で述べた文面の出来事とあいなったわけである。顔色はマッサオで、とても歩ける状態にない。緊急事態発生と、彼の荷物の一部をこっちに移し、救援を呼びに先を急ぐことにする。

1時間かかり温泉着、大塚さんすでにマッカッカのお顔。そのほかの男性陣ころよく救援にむかってもらい、先を急ぐため

に私の荷物を置いていた荷揚げリフト駅そばにて、登ってきた上野さんと合流。全部吐いたら体調回復したそうである。なにもあれ、一時はどうなるかと思われた出来事も一件落着。

部屋へ入って落ちついたのが5時で、食事が6時と、食事前にゆっくり風呂の時間がもてたのはありがたかった。

翌日も、これ以上はないという好天で、ただこれがいつまで続くか?…。予報では晴れのち雨(雪)。なんとなく今回は槍が見れそうと、はりきって登る。上野・伊勢コンビ結成初期、ここを苦労して登って槍がみえたのがわずか0.5秒、それも影。しかしその影がなかなかの感動だった思い出が残る燕なのである(1989.9/15)。その槍ヶ岳、合戦上部、ふと気付くと、凛とした姿を天に突き刺している。稜線に立つと、白い山脈が前方足下に輝いて…。

まもなく富士山も、槍もガスに隠れ、予報通りの雪の中を下山となる。

後記

ひとときの好天にめぐまれ、真冬の燕岳山頂に立つことができ、上部ではかなりの強風と、厳冬期の厳しさも少し味わい、厳冬期のやまなみをかいまた見た山行となりました。また、今回体験した緊迫した救出劇の舞台となった中房温泉への3キロの山道での出来事も、私にとっては忘ることのできない山での出来事となりました。

(伊勢)

裏六甲・不動岩 フリークライミング

◇H7.1/8

◇穴倉、佐藤、吉井、上田、作井
石黒、山崎

1月8日、高岡ハイキングクラブの登山学校・フリークライミング教室が兵庫県の裏六甲・不動岩で行われました。午前0時、いつもの駐車場に集合した参加者は、穴倉、佐藤、吉井、上田、作井のほか、ジャンダルム山岳会の石黒、山崎の7人。北陸道、名神高速、中国道と車を走らせ(実走行時間5時間)、午前7時過ぎ、不動岩前の駐車場に着きました。見上げると、快晴を知らせる霧の上に不動岩がありました。

雑木林の急な道を10分ほど歩くと正面壁と呼ばれる、幅約30cm、高さ約30cmの不動岩最大の岩壁の前に。南に面する正面壁の左3分の2は上部が前傾しており、10本ほどあるルートのどれ一つ一見して登れないのがわかりました。佐藤は、荷を降ろすことなく、朝日があたりだした、東壁側に回り込んでいました。

めあてのルートがあるらしく、後続した穴倉、吉井の見上げる中を作井をビレーヤーに東稜と呼ばれるところにスルスルとロープを20cmほどのぼし、ナンバープラースと呼ばれるところにトップロープを垂らしました。ナンバは不動岩でフリークライミングに火がついた最初のルートであり、グレードは5・10-。下部は5・8で、ピナクルでレストした後、続いて5・9のフレークを10cmほど登り、レストして残された5cmのシンクラック(5・10-)を登るルート。佐藤、石黒、作井は核心のシンクラックで筋肉がパンプして登れず、

山崎がただひとり登りました。これと同時に、ナンバの右数値にある小ハングルート（NまたはV）を穴倉がリードしてトップロープを設置、吉井、上田らがトライしました。

ナンバが登れなかったことで、教室の雰囲気はグレードダウンしました。5・9のルートをさがし、正面壁で1本、MCフェースで2本登りました。

この日不動岩は50人ほどの、高校生から中年の女性クライマーで賑わいました。ウリウリ（5・11+）を登る男性クライマー、朝早く来て単独登攀し、パートナーが来ると5・10のルートをかたっぱしからスピードにリードする女性クライマー、リードで練習する姿勢など、教室参加者はなにかショックを受け、なにかを感じたようです。今後のフリークライミング教室は、「5・10ルートを教材に、ペツルのボルトなどの支点があればリードで練習する（穴倉）」ことで早く初級者の域に入れるよう頑張ろうと、帰りの車の中で話し合いました。（穴倉）

その他、各山岳会の記録

日 程	山 域	参 加 者
富山登攀クラブ		
12/28-1/3	屋久島宮之浦岳 鹿児島開聞岳	杉森・尾矢・永盛・宮本
1/1-3	甲斐駒・Aフランケ・右同志会ルート	尾谷
1/8	奥ノ山	杉森・田畠
1/15	負釣山（リハビリ山行）	坂本
2/11	長瀬の先	羽柴
2/11-12	梅池	杉森
2/12	大辻山近く	羽柴
2/19	尖山・称名付近	羽柴
2/25	鳥ヶ尾山	宮本・羽柴・佐野川
高岡ハイキングクラブ		
1/1	鉢伏山	吉井・谷村
1/3	高坪山	吉井・下条
1/8	来坪山	中村（幸）・芹沢母娘・谷村・水上
富山山想会		
12/25	梅池～天狗原 山スキー	山田
12/29-1/9	ネパール・エベレスト街道 シャンボチエ・エベレストビューホ テルまで	亀村（高塚・峰尾）
1/8	肉藏山	西嶋
1/7-8	大品山	柴崎・崎田
1/25	尾洞山	西嶋
1/29	大品山	亀村・木戸・高柳・佐伯（久） 他高志山の会約30名
1/29	大双嶺山	西嶋
2/5	大平山 山スキー 片貝第2発電所より取付く	西嶋・崎田・山崎・柴崎
2/8	大高山	西嶋
2/11	細藏山・木/根山 伊折劍橋よりスキーで取付く	西嶋・柴崎
2/19	白越山 山スキー	米田・西嶋・柴崎
2/26	濁谷山 山スキー	西嶋

「山とやま」によせて

「岩と雪」も廃刊（休刊？）となったことだし、この辺で富山版イワユキでも作ろうかなぁ、と取りかかりました。富山の山屋がどんな活動を行っているのか知りたいというのがその動機。

今回は初回ということもあって、手さぐりの状態の出発となりました。今後この冊子をきっかけとし、もっと発展させ、山にたずさわる様々な人々を取り込んだ富山発『山の情報誌』を作っていくべきと考えています。

資料を寄せていただいた方々、ご協力ありがとうございました。

資料提供

羽柴倫子（富山登攀クラブ）

小林喜一（ハイキングこぶしの会）

村田慎二（ジャンダルム山岳会）

魚津岳友会

富山登攀クラブ

富山勤労者山岳会「ニュースたんぽぽ NO. 163 H7.2/8」

富山山想会「山想通信 NO. 115 H7.4/17」

高岡ハイキングクラブ「会報かたかご NO. 153 H7.2/1」